



338
145



始



338-145

Family Happiness



トルストイ原著

黒田亮譯述

家庭の幸福

大正
9. 4. 24
岡交

東京 内外出版協會

序

新しき文明は凡て覺醒の結果である。舊き傳習的道德の迷夢から脱して、近代文明の代表者として異彩を放つ二大偉人がある。一は獨乙のニーチェであつて、一は露西亞のトルストイである。吾々の人生は鞏固なる意志を以て奮闘するにある。即ち絶えざる努力である。而して自然界には優勝劣敗、適者生存といふ大法則が支配して居る。然るに吾々の從來奉じ來つた道德は、他人には同情せよ、身を殺して仁を爲せと教へ、個人の價値は全く没却せられ、當然滅亡すべき弱者の生存を全うせしめんとする。吾々は此の「奴隸道德」より離脱して「貴族道德」に進み、唯一絶對なる「超人」を理想とせねばならぬと説いたのは、ニ

家庭の幸福

トルストイ著

黒田亮譯

園ちやんと私は、秋亡くなつた母さんの喪に服して、お雪さんと唯三人、
全一冬を田舎で暮したのである。

お雪さんは年老つた親戚の者で、私共を育て、呉れた女教師である。私が
物心附いてからは、能く其の性質を解し、且又深く懐いたのであつた。園ち
やんは私の妹である。

ボク robes キの私等の古家に於ける冬は、物淋しく頼み少きものであつた。

氣候は寒く、嵐さへ吹きがちで、窓硝子は殆ど絶え間なく雪と霜に包まつてゐたから、外の物は何も見えない。斯くて、私達は始終垂籠めて居るより外は無かつた。友達の訪れることも稀である。縦令訪れて来たところで、家庭に喜びの聲を増すでもなし、笑ひさゝめきの起るでもなかつた。來る者も來る者も、陰氣な顔をした者ばかり、譬へば誰かの眠を覺ますを恐るゝかの様に、低々と話をし、力めて笑聲を避け、唯溜息を洩すばかりで、そして時々涙を流して、慎ましげに私の方を眺め、別して、心細げに何かして居る園ちやんをつつく／＼見遣るのであつた。

死の影は、今に尙ほ家の中に漂つて居る様に思はれ、死の悲哀と恐怖とは、有らゆる場所に漲つて居る様に感ぜられた。

母さんの部屋は閉めてある。夜、寝やうと思つて其の前を通り過ぎる途中、私は、悲哀を伴ふ苦痛と、あの冷たさうな空の部屋の中をば、我れ知らず覗

いて見やうとする一種不思議な刺戟とを感じた。

時に、私は十七歳だつた。丁度母さんが亡くなる前、母さんは、私に學問させる爲めに、町へ引移らうと計畫んで居られたのである。母さんの死去は私に取つて、慘苦な悲しいものであつた。が、私が自分で自分を爾う思つたのには、私が年若で且つ美しい——誰でも私を左様言つた。——のに、田舎にはばかり、尙う一冬をむざ／＼送るのは、實際同情すべき事ではあるまいかと云ふ感じが、有力なる原因を成して居つたことを、明白に白状しなければならぬ。

冬の末つ方になつて、淋しさと物憂さの堪へ難い心持が高じて來て、滅多に自分の部屋を出ることはせず、ビヤノの蓋は閉めたまゝ、本を手に取るのさへ厭な程であつた。お雪さんが、此れを爲い彼れを爲いと云つて呉れる時には、『私不欲よ、出來ません。』と斯う言つて、それから、『何故だらう、私の

生涯の中で一番嬉しかるべき時代が斯んなにして過ぎ行くのに、其の間で何故何かを爲ねばならぬのだらう。何故か知らず』との疑問が心の底で私語いた。

そして、此の間に對しては、何時も涙より外の答は無かつたのである。

皆は、私が漸々痩せ、色澤を失つて行くと言つた。けれども其れすら私には、少しも心に懸からなかつた。

『何故だらう？ 誰に會へと言ふのだらう？』

私の全生涯は、此の陰氣な寂寥と、頼りない暗黒の中に暮れて行く運命を有つてゐるかの様に思はれた。此の境遇を逃るべき力も、又希望も、私には全く無かつた。

冬も將に暮れんとする時、お雪さんは私に就いて氣を揉んで來た。それで、機會の有り次第、私を他地へ連れて行かうと決定たのである。さりとて、左

様するには金が無かつた。私達の有つてゐるものとしては、母さんが遺したものに就いての朦朧たる觀念のみであつた。で毎日々々、後見人が來て、家事向の事を決定て呉れるのを待ち設けてゐた。

三月になつて後見人は來た。

『ねえ、難有い事には、村岡さんが参りますよ。貴方へ參堂つて言つて來ました。お晝には此處へ見えませう。さあ、少し元氣を御出しなさい、ね、松ちやん。』斯う言つて又、

『でないと村岡さんは貴女を何と思ひなさるでせう、大層貴女方を好きなんですよ。』

或る日、私が部屋から部屋へと、ぶら／＼と何の目的もなく、影のやうに、うか／＼散歩つてゐた時、お雪さんは斯う私に言つた。

村岡進さんは、以前私の家の近隣に居た方であつて、年こそ大分若かつた

が、亡き父の友人である。此の方が来るので、私等の現状を一變して、田舎を去る事が能るだらう。其れのみか、子供の時分から、私は村岡さんが好きで、且又尊敬してゐたのである。だから、お雪さんが『少し元氣を御出しなさい。』と言つて呉れた時、私等の友達の誰よりも、村岡さんの前で、不愛想な素振を見せるのは、私に取つて心苦しい事だらうとはお雪さんが能く知つてゐたのである。其の上に、お雪さんと園ちゃん（村岡さんは園ちゃんの名親である）を初め厩丁に至るまで、家中の者は皆氣付いてゐる通り、私には村岡さんに對する往時からの馴染があるのは勿論であるが、のみならず私の眼には、母さんが私の前で言はれた言葉に依つて、特別な意味が附加はつてゐるのである。母さんは、或る日、お前をあんな方の許へ御嫁に遣ることが出来たら申分は無いと斯う言はれたのである。

其の時、母さんの語は、妙に、そして不快に私の胸に響いた。と言ふのは、

私の理想とする人は、彼の方とは全く類を異にしてゐたからである。私の理想は、優雅で、すらりとして、顔色青白く、幾分憂鬱の人であつた。然るに村岡さんは、最早若くはなし、丈は高く逞しく、そして何時も愉快さうに見えた。併しそれでも、母さんの語は、私の想像を種々に深くせしめたのである。六年前の事であつた。私が十一の時、村岡さんは、隔てのない『松ちゃん』で私に話し掛け、一緒に跳ね廻り、私を「董」と呼んだ。それで、若し村岡さんが、突然に私の妻になつて呉れと言ひ出したら、如何しやうかと、幾らか恐怖の念を以て私は其の後屢々心の中で自問自答して見たのである。晝飯前に、村岡さんは着いた。御馳走として、お雪さんが乳酪のバイやら、菠薐の醬汁やらを用意して居つた。窓から村岡さんが軽い權に乗つて、此方へ來るのが見えた。けれども、角を曲るので見えなくなるや否や、私は、餘り待ち兼ねた様子を見られたいないので、急いで應接室へ駆けて行つた。

が、村岡さんの足音、親切な聲音、お雪さんの足音などを聞くと、直ぐ最早會ひたくて走り出さずにはゐられなかつた。村岡さんはお雪さんの手を取つて重々しい聲で話してゐた。微笑は其の顔に現はれてゐる。私を見た時には、話を止めて頭も下げずに暫時私を見詰めてゐた。私は間が悪くなつて顔に紅が潮したのを感じた。

「やあ、貴女が松子さんですか。」と、お雪さんの手を放して、私の方へ來ながら、矯飾のない、正直さうな態度で言つた。

「左様に變ると云ふ事が有るもんか知らん。一體如何したんです、董は何處へ行つたでせう。今は貴女は全く聲を失つた薔薇ですよ。」

私の手を、其の大きい手に取つて、堅く、心を籠めて握つたので、殆ど痛い程であつた。接吻するんだらうと思つて、村岡さんの方へ寄りかゝつた。けれども、村岡さんは、もう一度握り緊めたばかりで、頓着せぬ愉快な目指で、

ちいつと私の眼を見入るのであつた。

六年の間、私は村岡さんを見なかつた。大變變つた。前よりも老けて、陰氣らしくなつた。今は頬髭を生やしてゐる。其れが餘程不似合である。併し以前に變らぬ飾氣のない態度、大形の目鼻立で、物に拘泥しない尊敬に値する顔、賢さうな輝く眼、可愛らしい、幾んど子供の様な微笑などは、未だに見ることが能るのである。

五分間も経つと、最早村岡さんは他人ではなくなつた。私等は家族の一人でもあるかのやうに思つたのである。婢僕までが、自ら望んで、村岡さんを招待したのでもあるかの様に、村岡さんの御來でを非常に喜んでゐる様子であつた。

村岡さんの態度は、母さんの死後訪れる近隣の人々とは全く異つてゐる。其の人達は、我家に居る間は、低々と耳語き、涙を流すにも、何か束縛せら

れてでもゐるやうにするのである。が村岡さんは、話好きで、面白さうで、そして母さんの事は一語も言はぬ。だから最初は、此の明瞭した無頓着さが、我家とは彼様に親しかつた人とも思はれぬ程、妙に又不都合な事と私を驚かしたのである。けれども、やがて此れは冷淡と云ふものではなくて、誠心實意の仕向けであると云ふことが解つて、此れに對して感謝したのであつた。

夕方、お雪さんは、茶を出すと云つて、居間の元の母さんの席に坐つた。園ちやんと私とは、お雪さんの側に座を占めた。五助爺やは、今迄保存つて置いた父さんの笛を取り出して村岡さんに渡した。すると村岡さんは、其れを持つたまゝ、宛然往時のやうに、部屋の内を彼方此方と歩き出した。

『思ひ回らすと、實に多くの恐ろしい變化が此の家に起つたのだね?』斯う言つて、急に立ち止つた。

『眞個に左様ですわ。』お雪さんは溜息つき、湯沸に蓋を爲ながら、村岡さんを見て、殆ど涙に咽ぶのであつた。

『貴女は父さんを覚えて御在でせう。』と村岡さんは私の方に振り向いて尋ねた。

『え、少し許り。』

『父さんが生きて御在になつたら、私などにも什麼に宜かつたでせう。』斯う言つて、優しく、同情深げに私の額や髪をしげく眺めつゝ言ひ續けた。

『貴女方の父さんは、私の親しい友達です。』

聲は一層優しく、眼は平常よりも輝いてる様に思はれた。

『眞個にね、母様までお亡くなりになるなんて、神の御思召でせうか。』とお雪さんは、茶器に拭布を載せると直ぐ、ハンケチを取り出して獻款を初めた。

『神の御思召? まあ左様思つて諦めるのです。兎に角、此の家は恐ろしく變つたもんだ。』又しても斯う繰り返したが、氣を替へたやうに園ちやんの方

を向いて、

『園ちゃん、貴嬢の玩具を御見せなさい。』

そして二人で客間へ行くのであつた。涙を宿した眼で、村岡さんの出て行く時、私はお雪さんの方を見た。其の時お雪さんは斯う言つた。

『まあ、何と云ふ好いお友達でせう。』

實際私も、此の善い友達と云ふ觀念の爲めに、心の周圍に、温みと慰藉との感情を覺えたのである。

二人で、居間に坐つてると、園ちゃんの笑ひ聲と、村岡さんの一緒に面白さうに巫山戯るのが聞える。茶を注いでると、村岡さんはピアノに對つたらしく、園ちゃんの小さな指と一緒に鍵を弾するのが聞えた。すると、

『松子さん、此處へ来て何か弾つて下さいませんか。』と言つたやうである。

私は彼の方が、私に命令けるやうに言ふ、あの飾のない親しい態度が氣に

入つた。立ち上つて行くと、

『さあ、これを弾つて下さい。』見ると、ベートオフェンの本が『月の光』と云ふソナタのアダジオの所で開かれてゐた。

『如何にお弾りなさるか、聽かせて戴きませう。』と言つて、茶碗を持つて部屋の間へ行くのであつた。

何故か、村岡さんと一所では、拒むことも出来ず、又拙いからと言つて、遠慮しても駄目だと思つたので、従順しくピアノに對つて、技能の有らんと弾いて試やうと思つたが、それでも、批評を聽くのが辛かつた。村岡さんは、音楽を解し又好んでゐると云ふことを、私は豫々知つてゐたので。

アダジオは、卓子に倚つて覺醒せられた回想の情緒に通つたのである。そして可也に巧く出来たと私は考へた。けれども村岡さんはスケルツォを弾れとは私に求めなかつた。

「いや、貴女は未だお巧者だとは申されませんが、正直なところ。併し最初のは拙くはなかつたやうです。貴女は音楽の智識はお有りなさるに違ひない。」
 分不相應では、確にないと思ふ此の賞讃に、餘り嬉しいので顔を赤らめた。
 尊敬すべき人、而も父さんの友達であつた年長の方が、語るに足る者であるかの如く、又今迄の如き小兒扱ひをしないで、真面目に私と話をして下さるのかと思ふと、新しい愉快な経験を感ずるのであつた。

お雪さんは、園ちゃんを寝かせやうとて二階へ連れて行つて、二人は客間に残つた。

村岡さんは、父さんの事を話し、如何に同情の紐が兩人を結びつけたか、又二人の生活が其れに依つて如何に幸福を加へたか、當時私は未だ頑是ない小兒で、繪本や人形を持つて嬉しがつた事まで、何くれと語るものであつた。此の人の話で、私は初めて、父さんは、瀟洒した人好のする人であつた様に

感じたのである。今迄能くは知らなかつたのを。

村岡さんは又、私の趣味、私の讀物、私の希望などに就いて尋ねもし忠告もして下すつた。最早單に、面白可笑しく、笑戲を言ひ、私を弄り、玩具にする遊び仲間ではなくて、真面目な、熱心な、好ましき人であつた。此の人に、我れ知らず、愛敬と同情とに依つて、牽引られる様に感じた。一緒に話して居る間は、全く氣が樂になつて、又真に其の樂みを味つたのである。が其れと同時に、或る一種の拘束を我身に感ぜざるを得なかつた。村岡さんの話す一言一句にも、心を動かさし、今迄單に私が父さんの娘であると云ふ事から受けた村岡さんの愛情に對しても、其の價値あれがしと切に冀望したのである。

園ちゃんを寝かせてから、お雪さんも一緒になつて、それから、私が平生園ちゃんやお雪さんに不親切だと言つて村岡さんに訴へるのであつた。此の

事に就いては、私は何も言つて置かなかつたのである。

『では松子さんは、緊要な事は言はなかつたんですね。』と顔に笑を湛へて、私を責めるかのやうに點頭きながら斯う言つた。

『でも如何したら宜いんでせう。唯退屈だと云ふ外何も言ふ事は有りませんでしたもの。けれど、纏て其れは無くなるで御座いませう。』

實際此の瞬間に於て、倦怠の感は無くならうとしてゐるのみか、既に疾の昔に過ぎ去つて、少とも辛くはなかつた様に思はれたのである。

『淋しさを耐へることの出来ぬのは不幸です。貴女はもう立派な淑女ではありませんか。』

『仰つしやる通りですわ。』笑ひながら私は言つた。

『は、あ、松子さんは、何か讀められた時だけ活潑で、一人になると直ぐ、曩の元氣は何處へやらで、何物にも趣味を有たなくなる憐れな淑女です。』

『私の批評が大層お上手ですこと。』何か言はうと思つて斯う私は言つた。すると、暫時黙つてゐた後、

『いや、貴女が父さん似で御在での事は、全然否定することは出来ません、貴女にも何か知らぬ物が潜んでゐる様です。』

そして再び、其の親切さうな、心の底まで見貫くやうな眼は、媚びるやうに私を凝視めた。私の心は、異様に快い當惑を以て充たされたのであつた。

初めて私は、彼様に親しさうに見えることから、深く私に印象を與へた彼の顔が、村岡さん獨特の表情を有つてゐることに氣が付いて、一寸見は如何にも晴朗だが、後には漸々考へ込むやうになり、結局却つて陰氣に見える程に私は覺えたのである。

『何も退屈し氣落ちする理由は無いではありませんか。音楽を解し、書物も讀め、貴女の幸福な全生涯は前途に見えてゐるではありませんか。で、後に

後悔しない爲めに、今こそ貴女が準備をなさる唯一の時です。一年経てば既に遅しですよ。『父さんか叔父さんかでもあるやうに、私に話をなさるのである。そして、絶えず、私を見下げる事のないやうにと心を配るのが解つた。それでも私には、村岡さんが、矢張り私を目下の者と見てゐるらしい口吻が氣に逆かつた。が同時に又、此れも私の爲めを思ひばこそと、却つて嬉しいやうにも思つた。實に私の爲めばかりに、斯うして其の眞情を示さんと胸を悩まされるのであつた。』

其れから村岡さんは、お雪さんと家事向の事を相談した。相談が大略終ると、

『では皆様左様なら。』と立ち上つて村岡さんは私の方へ来て、手を握つた。

『何時再來らして下さいますか、村岡さん。』とお雪さんが尋ねると、

『春になつたら又御目に懸りませう。』尚ほ手を握つたまゝ、『今はダニロブカ

へ行かうと思つてゐます。』ダニロブカは我家の第二の住居地である。『當分彼處で萬事お心添致しませう、そして出来る限り整理の道を附けて見ませう。それから僕一個の用事で莫斯科へ行き、春また此處へ來ることになるでせう。』

『おや、如何して左様に永く他方へお在でなさらねばならんでせう。』悲しくなつて私は尋ねた。實は毎日なりとも會ひたい。心淋しく堪へ難い思ひに、以前の憂愁が又もや歸つて來るらしい。恐らく私の眼の中と云はず聲と云はず、總てに此の感情が表はれたに違ひない。

『努めて身體を忙しくして、鬱しない様になさい。』全く冷靜に、沈著いた調子で言つて、

『春になつたら検査に來ますから。』と私の手を放し、私の方を見向きもしないで言ひ足したのである。

村岡さんが毛皮裏の外套を被て居る間、私等が立つてゐた次の間で、又も村岡さんの眼は私を捜す様に思はれた。

『あんなに心配して下すつても何にもならんわ。あんな風に私を見て下さるのが、私に取つて嬉しい事と考へてゐなさるのか知らん。眞個に好い方だわ、だけど唯其れだけ……か知らん。』と、心の中で我と我身に尋ねて見たのである。

彼此れして、お雪さんと私が寢床に就いた時はもう餘程夜も更けてゐた。兩人は今宵の事を話し合つた。が村岡さんの人物に就いては何も言はなかつた。そして来るべき春夏を如何して暮さうか、或は來年の冬は何處に又如何な風に住ふべきかと、種々な事を相談した。

『何故だらう。』と云ふ疑問の妖怪は永久に私に返つて來なかつた。人は幸福ならんが爲めに生存すべきであると云ふ事は、私には極めて簡單で且つ明瞭

な事と思はれたのである。そして我が未來は多大の幸福を持來すだらうと思像した。すると彼様に古く、彼様に陰鬱に見えたボクロボスキの我家は、今や急に生氣と光明とに包まれて、私の心裡に顯れるのであつた。

二

春は來た。

嘗ての心の懊惱は痕もなく消えて、春の夢のやうな哀愁と、朦朧たる希望と欲求とが其の空所を占領した。

私は冬の初よりも健かたで、妹の園ちゃんも、音楽、讀書を友に暮したのであるが、又折々は庭に出て遊び、或は腰掛に憩み、或は此處彼處と野の小徑を漫歩ひ、心はあらゆる思想、あらゆる希望、あらゆる欲求を以て充たされたのである。

殊に月明るき夜は、終夜部屋の窓に凭れて居ることもある。そして夜が明けけるや否や、寝衣のまゝ、お雪さんを覺さないやうに密と庭に下り、露深き草葉を押し分けて、池の邊に出るのであつた。一度私は、夜半に唯獨り庭を一周したことも有つた。其の時私の想像を充たした彼の幻影を思ひ起し、且つ此れを解釋するのは、私に取つて困難しい事である。よし其れが出来たところで、私の夢が果して彼のやうなものから成り立つてゐたのか、殆ど信ずることが出来ぬ。餘りに不可思議で現實に遠かつてゐたからである。

五月の末つ方、村岡さんは約束通り再び來られた。夕方突然に訪れて、私共を全然驚かせた。丁度觀臺の上で椅子に腰掛けて茶を飲まうとして居た所だつた。庭は早や緑の衣を被てゐる。夜鶯は、樹々の茂みの到る處に往來して居る。紫丁香花の藪は、枝が總をなして、白や紫やに彩色られて、花は溢れん許りの風情である。菩提樹の列樹は、葉が沈み行く日影に依つて透き通

るやうで、鮮かな、冷たき影は、觀臺の上を長く延びてゐた。草は夕の露でしつとり濡れてゐる。庭の彼方には、此の日の最後の叫聲が聞え、牛や豚が騒然と牧場から逐はれて行く。木訥な僧侶さんが觀臺の前の小徑を徐ろに過ぎて行く。手には如露を携つてゐた。其の口から出る冷たげな水は、やがて天笠牡丹の莖と其の支棒の周圍の乾いた土を見る間に黒くするのであつた。私等の傍には、白い布の上に、びか／＼磨かれた湯沸が置いてある。乳酪、甘麵麩、冷肉などもあつた。丸々と肥えた手で、お雪さんは、能く氣の付く主婦のやうに、茶碗を拭いてゐた。私はもう晩飯を待つてゐる事は出来なかつた。湯へ入つた後で大層空腹いので、濃い、新しい乳酪と共に、麩麵を食べて居つた。私は、だぶ／＼した袖の附いてる麻の上衣を着て、濡れ髪をば手巾で覆うてゐた。お雪さんが最初に村岡さんを説から見付けたのである。

『おやまあ村岡さん、今も今とて貴郎の噂をしてゐたのですよ。』

私は立ち上つて、着更を爲る爲めに上階へ走つて行かうとしたが、丁度屏の處で、ばつたり村岡さんに會つた。

「田舎に居ながら何の遠慮が要るものですか。斯う言つて、笑ひながら私の手や手巾を一寸見て、」

「ねえ、貴女は五助爺やの前で其の著物を着てゐて何ともないでせう、僕とても五助爺やと違つた所は無いではありませんか。」

けれども此の瞬間に於て、五助爺やの夢にも考へ及ばぬ態度で私を見詰めたやうで、胸安からぬ思がしたのである。

「直ぐ参りますわ。」村岡さんを外さうと思つて、少し急いで斯う言ふと、

「何がそんなに間の悪い事が有るものですか、貴女は丁度百姓家の娘のやうに見えますよ。」

私は其れに答へず、上階へと走つた。

「可笑いわ、如何してあんな顔をして私を見たのだらう。」上階で急いで着更しながら心の中で斯う言つた。「だが嬉しいわ、村岡さんが来たんだもの。今度は一層愉快だらう。」

鏡を一瞥と見て、いそ／＼下階へ降りた。そして大急ぎで、呼吸を迫らして觀臺へ駆けつけたのであつた。村岡さんは卓子に著席してお雪さんと家事上の事を話して居られた。私を見ると微笑して、そしてまた話を續けた。此の方の御蔭で、家政の事は總て申分ない程に運んだのである。今は唯、此の夏だけを田舎で送れば其れで宜いので、其後は園ちやんの修業の爲めに、彼得堡か外國か何方かへ行かれるのである。

「ねえ、村岡さん。私達が外國に居ります間貴郎も一所にお在でなすつて下さると宜いんですけれど……若し三人きりなら森の中に居るより悪いわ。」お雪さんが斯う言ふと、

『貴等々と同伴に世界を巡り歩いたら、如何に幸福な事でせう。』と半ば眞面目に半ば笑戲のやうに言つた。そこで私は、

『ちや左様しませう、一緒に世界を廻り歩きませう。』と言ふと、又微笑してが、頭を振つて、

『併し僕の母さんは如何言ふか？ それに家の都合が……いや斯んな事は問題にはなりません。ですが如何でした、如何して御暮しでした？ もう鬱しなされることは無かつたですか。』

私は村岡さんの去つた以來、此事をし彼事をして、些も苦勞を感せなかつたことを話した。そしてお雪さんが私の詞を確かめ私を讃めちぎつた時、村岡さんは顔に詞に、態とらしい程私に感心して、私が小兒でもあるかの様に、私を愛する心持を示すのであつた。

此の夕方は如何にも温かで氣持が好かつたから、茶道具などが片附けられ

た後も、尙ほ觀臺の上で腰掛けて居た。會話が餘りに弾んだので、何時とは知らず次第／＼に近邊の人の聲が消えて行くのにも氣が付かなかつた。四方から一層馨しく花の香が浮動いて来る。露は滋く芝生の上に結んで、近くの藪に震聲で歌つてゐる夜鶯は、私等の笑聲を聞くとばつたり歌を中止する。満天溢る、許りの星空は、今にも私等の頭の上に落ち被さつて来るのでないかとまでに見えた。

一羽の蝙蝠が觀臺の上を覆うてゐる日除の下をすうつと飛んで行く時、また私の白い肩掛のあたりにばた／＼羽敲きする時にのみ、もう疾に暗くなつたのだと急に氣が付くのであつた。一旦墻の方へ飛び去つた蝙蝠は、前と同じ速度で音もなく歸つて来て、日除の下を逸けて又庭の暗闇に隠れて了つた。『ボクロボスキは僕どうも大好きです、此の臺の上に斯うして一生を送りたいものです。』と急に話頭を更へて村岡さんは言つた。お雪さんが、

『では何時までも此處に坐つて居なすつたら宜いでせう。』

『其れは至極結構です、けれども人生は静として坐つて居られるものではありませんか。』

『何故貴郎は結婚なさいませんか？ 立派な旦那様になりますのに。』

『難有う。何、外でもありません、静かな生活が好きですから。』と言つて笑ひながら、

『いやお雪さん、貴女や僕には希望も何もありません。すつと以前から誰も僕を未婚の人と思ふ者はありません。此の點からして愈々僕は、是が結局氣樂だと云ふ結論に到着したのです、いや全くです。』

村岡さんの態度には、何うやら装つたらしい快活が見えるやうな氣がしてならなかつた。

『おや左様ですの？ 三十六歳に御成りなすつて、そして生の倦怠とかを覺

えませんか？ ほ、ほ、ほ。』

『は、併し今迄行つて来たではありませんか。僕の唯一の願望は静かな生涯を送りたいと云ふのです。結婚するには何か外の物が要るでせう……』

これは松子さんに聞くんですね。私の方へ眼を向けて、

『結婚すると云ふ事は斯ういふ嬢さん方の事です、貴女や僕などは傍で眺めて其の幸福を喜ぶのです。』

聲には哀愁の低き調子と、私の注意を逸しなかつた熱烈とが籠つてゐた。

村岡さんは暫時黙つたまゝで、お雪さんも私も一語も洩さなかつた。

『先づ斯うですね。』と村岡さんは椅子を向け直して言ひ續けた。

『偶然として僕が急に或る十七八歳の娘、譬へば松ちゃん、——柏木松子さんのやうな令嬢と結婚することになつたと假定するですね。さうしたら如何でせう。大變面白い比喩ではありませんか、僕は斯んな面白い比喩を見出した

のを嬉しく思ひます。』

私は笑つた。だが斯んな比喻を嬉しがる理由を解することは出来ぬし、又其の適用が如何いふ風になるのか一向推知らなかつた。

『松子さん。』と戯弄ふ様な調子で呼びかけて、

『正直に、真心から仰つしやつて下さい。茲に一人の年取つた人が有るとして、ね、宜いですか、此の人は最早盛年も過ぎ、そして唯一の希望は安靜な生活であるとしたら、貴女は斯んな人と結婚するのは随分な不幸とは思ひませんか。希望と活動とは貴女の生命なんでせう、貴女は何ぞ御考へですか。』私は、何と言つて宜いのやら分らないので、只もちくして黙つてゐたのである。

『いや松子さん、僕の言ふ事を求婚するのかと勘違ひなすつては迷惑です。

が、貴女が午後庭の樹蔭を漫步ふ時、心裡に描いて見る他日の良人は如何な

資格の人です。今言つた様な人と夫婦になるのは不幸とお思ひですか。』斯う言つて微笑むのであつた。

『いゝえ、何も不幸などと其様事は……』

『併し其れでも満足だとは……』と私の詞を補つた。

『仰つしやる通りですわ、それとも謬見……』

又も村岡さんは遮つて、

『否其んな事はありません、全く御説の通りです。貴女が憚る所無く仰つしやつて下さつたことに對して感謝します。で私の知つてる限りでは、斯んな結婚は最大の不幸でありませう。』

『何て妙な方でせう、貴郎は。以前と些も變りませんわね。』お雪さんは斯う言つて、晚餐の用意にと觀臺を去るのであつた。

お雪さんが去つてから二人は無言のまゝ坐つて居た。周圍は寂然として物

音一つ聞えない。唯夜鶯のみが又もや歌ひ出すのであつた。が其れも夕方の如くに卒爾に囀るのではなくて、更け行く夜半にも髣髴と、極めて静かな玉を轉すやうな音が樹間から洩れ来るのである。そして其の音が庭一杯に響き渡ると、何處やら遠くから他の一羽が、此れに調子を合すのであつた。すると庭の最も近くに居るのは、暫時耳を澄まして其れを聞いてゐるやう、やがて一層朗かに力強く、流るゝやうな音を響かせて、此の天地を支配する静寂と共に、此の夜の世界は彼等のみの領地で、我等の存在には全く意味なきかの様に思はれるのであつた。

豪腕師は早寝をする爲めに暖室の方へ行つた。重い靴の音は徑に沿うて次第々々に微弱になつて行く。誰であらう小山の麓で鋭い口笛を二度鳴らした。それから復び元の静寂となつた。木の葉は殆ど擦れ合ふ音さへしない。觀臺を覆うてゐる布の日除が少し揺ぐと、やがて地心よい響が身邊に浮動するの

である。

種々話をした後黙つて坐つて居るのは、何か知らきまりが悪かつた。が何か言はうとしては言ひ淀んだ。

私は村岡さんの顔を眺めた。眼は闇の中に輝いて、ちいつと私を凝視めた。

『斯うして私のやうに、世の中に一人で生活すのも好いものですよ。』

何の理由か、はつと私は溜息吐いた。

『什麼なすつた？』

『眞個に左様思ひますわ、一人で生活すのは好いですわ』私は重ねて斯う言つた。

其れきりで、時は又もや沈黙の中に過ぎ、再び窮屈を感じるのであつた。

と、此の方が年長つた人であるといふ事に跋を合したので感情を害しはせぬだらうかと、斯んな事が胸に浮んだ。其れで慰めやうと焦心つたが、さりと

と、此の方が年長つた人であるといふ事に跋を合したので感情を害しはせぬ

て爾うする事も出来なかつた。

『では左様なら。立ち上りながら村岡さんは、』

『母が家で待つて居りませうから……今日は朝から未だ會はなかつたのです。』

『未だ宜しいでは御座いませんか、貴郎に新しいソナタをお聞かせ申さうと思つてましたの。』

『何れまた此の次回に。』無情く斯う言はれた。

『左様なら。』

確かに幾分か氣を損ねなかつたらしい、濟まなかつたと私は思つた。お雪さんと私は、玄關まで送つた。そして庭に立つて道路の方を見てゐると、間もなく村岡さんの後影は見えなくなつた。

村岡さんの騎つてる馬の足音が消えると、私は再び觀臺に登つて庭の關を

凝視めた。そして露滋き暗黒が夜の響を包んでゐる中に、長い間、想像が生む凡ての物を見もし聞きもするものであつた。

其後村岡さんは二度も三度も訪れた。鹿爪らしい會話から起る束縛は痕もなく失せて、二度と歸つて來なかつた。

夏も盛りになつて來ると、一週間に二三度も馬に乗つて見舞はれるので、村岡さんの訪問には全然慣れてしまつて、少しでも永く會はずにゐると、一日千秋の思ひで淋しみを感ぜ、何故斯う人焦しの眞似をなさるだらうと恨ま

ずには居られなかつた。

村岡さんの私に對する態度は、若い友達に對する其れである。何故と物事を質問もし、天真爛漫の無邪氣を奨め勵まし、忠告もし、鼓吹もし、時としては叱つて私を腹立たせることもあつた。

村岡さんが努めて私と同じ水平線に立たうと心を配るにも關はらず、村岡

さんの言語舉動の端々から窺ひ得る此の人の裏面には、私などに同伴を許す必要を認めぬ別世界が有つて、其れが私の想像の上に大勢力を有つて居つた。私を村岡さんの方に牽引けるのは、實に此の點に外ならぬのであつた。

私はお雪さんや近所の人の話で斯う云ふ事を知つた。村岡さんには、一緒に住んで居られる年老つた母さんへの配慮、地主として又私共の後見人としての責任の外に、貴族と關係してゐる或る職務が有るさうで、其れをまた大層五月蠅がつて居られると云ふ事である。

だが此等の事をば實際什麼考へてお在でなさるのか知らん。村岡さんの本當の計畫は何だらう、確信は何だらう、そして希望は？ 斯んな事は村岡さんの談話から唯の一度も聞くことは出来なかつた。話を少しでも村岡さんの家事向の方へ持つて行かうとすると、直ぐ其の獨特の態度で眉を蹙め、『何卒爾ういふ事は仰つしやらんで……何も御心配下さる事も有りません』と他の

話題に轉るのであつた。

最初は此れが寔に恨めしかつたが、後には自分の事だけ話すことに慣れて、且つ又其れが自然らしく思はれて來た。

初めは何時も私を不快にさせながら、後には却つて愉快になつて來るのは、私の外貌に對する村岡さんの如何にも素知らぬ風と、外見上時々私を刺戟する嫌忌ふやうな態度であつた。『貴女は美しい。』などとは苟且にも口にも出さねば、そんな顔さへもなさらぬ。が其の目の前で私が人に美しいと言はれる時は、同意するやうに眉を動かし、そして微笑むのであつた。村岡さんは私の缺點を搜し出さうとさへ苦心して、見付かると其れに就いて散々戲弄する。御祝祭の折などに、お雪さんが好んで着せて呉れる流行の衣服や又は髪の毛の裝飾でも見やうものなら、それこそ皮肉な批評を試み、それが爲めお雪さんの感情を害すばかりか、初めは私をも、什麼して宜いやらと途方に暮れさ

せた。

私が村岡さんを好きだと云ふ事を心の中で感知してゐるお雪さんは、眩目さばかりに見せかけて牽引けやうとする婦女を、什麼して彼の方はあんなに好かんのだらうと訝るのであつた。

けれども間もなく私は、村岡さんの欲する所を知るに至つた。村岡さんは、私に嬌飾して人の心を奪はうと云ふやうな氣が有りはしないだらうかと確めたい様子であつた。斯う了解つて來ると、私には其んな事は塵程も無い、衣服にも髪にも但しは私の行爲にも、と云ふ事を明かにした。然し私ぐらゐな年齢で殊更質朴な風をするのは、丁度白糸の縫箱のやうなもので、未だ飾の無いと云ふ事が自然でない時に、普通に外れて態と飾の無い質朴な風をするのは、却つて一種變則の嬌飾ではあるまいか。

村岡さんが私を愛して居られると云ふ事は知つた。けれども其れが小兒と

してか、婦人としてか、何らであるか自分にも尋ねて見なかつた。兎に角此の愛は私には實に貴いもので、村岡さんが私を世に又と無き娘であると考へて居られるかと思へば、願はくば此の幻影の中に、何時までも村岡さんが留まつて居られるやうにと祈らざるを得なかつたのである。そして私は我れ知らず此の方を欺いた。が斯んな工合に欺いた行爲さへ私には却つて都合が宜かつたのである。肉體よりも精神の美點を示すのが、私に取つて什麼に賢く什麼に高尚な事であつたらう。

私の髪、私の手、私の顔、私の身振、假令其れが如何であれ、好かれ悪しかれ、村岡さんは一瞥で了解し評價するだらう。だから假令此等のものので欺さうと思つたにしても、實際以上に其の目を牽くべき何物を加へることが出來やう。

併し私の精神は御存じない、そして其れを愛してゐなされる。又それは始終

擴がり且つ進歩しつゝある。其れ故私が欺すことが出来るし、又實際欺しもしたのである。爾うと明白に了解つて見れば、村岡さんを待遇ふことは極めて易々たるもので、嘗て我が胸を痛めた根據なき煩悶——中にも取り分け羞恥の感——などは全く消え失せて仕舞つたのである。什麼な風に見えやうと、前に居やうと側に居やうと、坐つて居やうと立つてゐやうと、髪が散れてゐやうと立派であらうと、村岡さんは一から十まで私を解して下さる。そして其の折々に私が満足してゐる様に村岡さんも満足するのであつた。

此の事は事實である。で若し村岡さんが其の習慣に反して他人の例に習ひ、『貴女は眞個にお美しい。』とでも言はれたなら、私は些も嬉しくない。爾うでなくて、故意と何か意味の無いやうな事を言つた後、ちいつと私を凝視め、口吻に戲弄ふやうな調子を出さうとしながら、其のくせ少し顫動を帯びた聲で、『左様です、左様です、貴女には何物か有りませう。貴女は立派な娘

さんです。左様言はなければなりません。』と言はれた時は、私は如何に幸福で心も軽くなつて行つたらう。

爾ういふ時私が立派な且つ賞讃すべき物を選択した彼の怪むべき鋭敏な直覺力は、私自身にさへ奇しく思はれた。然りとて當時私は確に何が善いものか、何が賞讃すべき價値あるものか了解らなかつたのである。

私の従來の習慣や趣味の多くは、村岡さんの喜ばぬもので、村岡さんが一寸眉を動かすのと、一瞥見るのみに依つて、初めて私の言つてる事が御好きでないのだなと察するのであつた。そして村岡さん獨特の、妙に此方の氣を沈める、殆ど侮蔑むやうな表情が、私をして嘗て愛した物を嫌ふ可く感せしめるのであつた。

諷示一つが、村岡さんの將に私に言はうとしてゐる事を豫め覺らしむるに充分であつた。村岡さんは私に何か問ひ掛けるが常だ、そして射るやうに私

の瞳を見る。すると此の一瞥で、充分私に、村岡さんは何を知らたいのだからと云ふ思考を捨てさせるのである。此の時に於ける有らゆる私の思想乃至感情は、村岡さんのもので私のではない。若し其れが真正に私になると、此等は皆私の生涯に光明を放たしむるものであつた。が私は夢にも是を自覺することなく、而も萬事を異つた眼を以て観察した。お雪さん、婢僕、園ちやん、私、私の仕事を。

單に時間費しの爲め嘗て讀んだ書物は、私の生活の最大快樂の一つとなつた。其の理由は唯、兩人が書物の話をしたり、又相共に讀まれる、是に過ぎないのである。村岡さんは絶えず書物を私に供給して下さつた。

以前、園ちやんの御稽古を監督して送つた時は辛氣かつた。そして私は唯此れは私の義務だと云ふ強制的の感情を以て従事したのである。然るに今は、村岡さんが園ちやんの御稽古に大層興味を有つて居られるので、園ちやんが

如何に進歩したか勉強したかを見るのは、私に取つて一つの樂みとなつた。

今迄は、音樂の譜を殊らず譜記するのは到底不可能の事と思はれたのに、今度は村岡さんが聽いて下さるだらう、恐らく讚めて下さるだらう、斯う思つて、全然記憶するまで一つの譜を五十遍も練習するので、御氣の毒にもお雪さんは綿を耳に挟むのであつた。けれど私は些も億劫だとも思はなかつた。舊式のソナタも如何にか斯うにか、今迄とは全く異つた風に響き、そして又引種の結果を生み出したのである。

私が自身のやうに能く解し能く愛したお雪さんまでが私の眼には一變して來た。初めて私は、お雪さんは最早今迄のやうに、我等の母たり、友たり、召使たるべき義務は無いことを知つた。私は總ての貴き精神の無我と信仰とを貴び、お雪さんに負うてゐる總ての物を尊重し、以前にも増してお雪さんを愛した。

村岡さんは、我家に使はれて居る者の總て、小作人、下男、下女、此等の者を、皆全く前とは違つた風に觀察することを私に教へた。

私は十七年も此等の人々の間に生ひ立ち乍ら、私が未だ見たことのない人に就いてよりも、此の人々に就いての智識に缺乏てた事を、今更白状するのにも恥かしい。此等の男子や婦女にも、私と同じ愛情、希望、悲哀の有ることは、今迄一度として私の胸に浮ばなかつたのである。

我が庭、我が森、我が畑、永く私に親しかつた此等の物が、突然私の眼に新しい美を映した。人生には唯一の無窮の幸福——他人の爲めに生存る生涯——が在ると云ふ村岡さんの説は決して空しいものではなかつた。此の事を了解しなかつた當座は、村岡さんの談話に變だと思はれる事が多かつたが、遂に悟り得た此の確信を、胸底深く刻み込むに至つたのである。村岡さんは、私の爲めに、今現に喜悦の全生涯を開いて下さつた。それで私の身上には何

等外見上の變化も無ければ、眼に映る有りとあらゆる印象の中に、村岡さん其人の外何物を加へたのでもない。小兒の時から、私の周圍に沈滞してゐた物は今悉く、激刺たる生氣を附與せられたのである。村岡さんが見えると、萬事話に花が咲くと同時に、私の心も軽くなり喜悦に溢れるのであつた。

折々私は上階の我が部屋へ行き、寢臺に身を投げ、春が未來を描かせた彼の陰鬱な期待、希望、欲求ではなくて、現在の幸福に我身を揺らるゝに委すのであつた。夜も其れが爲め眠ることの出来ない時は、起きてお雪さんの寢臺へ移つて、其の同情ある耳に、私が昨今の幸福を打明けて耳語く。さて我に歸ると、お雪さんに話す何等の理由としては無い。けれどお雪さんは、『それは結構で御座いますね、私も亦大變幸福で御座います。』と斯う言つて、私に接吻するのであつた。私はお雪さんを信じてゐた。

誰でも幸福であると云ふ事は何よりも必要なのだと、私は幾度も思ひく

した。

がお雪さんは私と異つて、幸福であると同時に能く眠ることが出来た。時々態と騒いで私を寢臺から追ひ出して、それから睡眠に入るのであつた。併し私はつくづく幸福の理由を考へながら、依然眼が冴えてゐるのが常であつた。

時には起き上つて再度の祈禱を捧げ、神の恵んで下された幸福に對して、言葉を以て神に謝したことも有つた。

部屋の中は静寂としてゐる。唯聞えるものはお雪さんの低い規則正しい鼾聲、其の傍にあるカチ／＼と云ふ時計の刻音、私の絶間なき寢返り、知らず識らず吐く中絶々々の言葉、頭に掛けた十字架を接吻する音ばかり。

戸扉は閉つて、雨戸は下されてゐる。蠅や蚊が處々にブーンと音をさせる。と、私は何時迄も斯うして此の小さな部屋に居たい、朝が永久に歸つて來る

ことの無いやうに、そして永久に此の現在の我が精神的勇圍氣を身の周圍に引き留めて静かにして居られるやうにと思つた。斯ういふ時には、恰も私の夢、私の思想、私の祈禱が生きてる物のやうに、私と共に此の暗黒に住み、寢臺の邊を飛んで行くやうに思はれ、又我が體の上の方で羽敲きするやうであつた。

そして、有りとあらゆる思想は威く村岡さんの思想で、有りとあらゆる感情は威く村岡さんの感情であつた。此の時には、此れが果して戀愛であるか否かは尙ほ知らなかつた。そして私は考へた、此の感情は何物にも交換へられる憂なく、永劫に繼續するであらうと。

三

或る日の事、殺類收穫の最中、お雪さん、園ちゃん、そして私の三人は、

晝飯の後で庭に出て、例の親密の腰掛に憩んだ。此處は谷間を見渡してゐる菩提樹の蔭で、向方には森や野の景色が展開してゐる。

村岡さんは二日の間、私共を訪れなかつた。で今日は一同して其の來られるのを待つて居た。

凡そ二時頃とも思はれる時、村岡さんが裸麥の畑を横つて馬に騎つて來れるのを見受けた。お雪さんは立つて下女を呼んで、村岡さんの大好な桃と櫻實を持つて來るやうに言つて、其れから微笑みながら私を一瞥と見て、さも心地好さうに又腰掛に腰を下して、やがて微睡むのであつた。

私は液汁の多い葉と濕つほい皮が着いて垂れ懸つてゐる菩提樹の曲つた枝を挽ぎ取つたので手が濕つた。そして私はお雪さんを扇ぎつゝ、村岡さんの通つて來られる作道道を始終見下しながらも書物を讀み續けた。

園ちゃんも老菩提樹の根本に坐つて人形の四阿屋を拵へるのに忙がしい。

此の日は暑く静かで、蒸然とする様であつた。雲は寄り集まつて黒ずんで來た。朝から夕立模様で今にも降つて來はしまいかと怪まるゝばかりであつた。私は平常の驟雨前に於けるが如く、胸騒ぎがした。けれども正午頃からは漸々雲も散つて、太陽は輝き照るのであつた。唯天の一角にのみ低い吐くやうな雷が聞えるばかり、厚い雲の地平線上に聚積り、野を覆うてゐる塵に接してゐるのが、時々、地上に投げる雷光のピカ／＼と閃く之字形に依つて中斷せられるのが見える。少くとも今日は夕立を免れることは明瞭であつた。

庭の後方に、處々見える道の上に、麥束を山と積んだ荷車の、退屈さうな鈍い響が聞えるかと思ふと、今度は空車が威勢好く、再新たに荷を積み運ばん爲めに急いで走る。是には様々の色をした襯衣を着てゐる百姓が隨いて行く。

厚い塵埃は、動きもせねば、靜定としてもゐぬ。併し、空中、籬の後、庭

にある疎らな木の葉隠れに瀾漫してゐるのである。

遙か彼方、穀倉の處に、人聲、車の軌る音、籬の傍を悠々と動いて行く黄色の麥束のさら／＼と云ふ響が聞える。そして此の束が漸次空中に積み高げられて、遂には卵形の家に見えて来た。其の屋根は頭部が尖つて居て、周圍には蜂の如くに群つてる百姓の姿が見える。

塵深い野の上をも、荷車が通つてゐる。其處にも亦黄色の束が見える。車の響、人の聲、歌の餘韻は私の耳へと運ばれて来る。

一方には、苦蓬の亂生してゐる垣の幾條もある野が愈々開けて行く。右手の方遙か遠方の不規則に半ば折り取られた畑に至るまで、私は婦人の鮮かな色の衣服を見ることが出来た。此の人達は麥を束ねて、そして是を一所に纏める。今迄見えなかつた畑の地が見え、能く整つた束が處々畑の面に曝される時、人々の下に屈むのも見えれば手を動かすのも見える。

と突然私は、急に夏が去つて、一陣の秋風身邊に吹き来るを覺えたのである。其の風を送つた庭の隅の床しき樹立を除いては、到る處に塵埃と熱とが漲つてゐる。此處にも彼處にも、塵埃と熱との中に太陽の光線に曝されて、一心に勞働する人々が、話しながらがや／＼と動きまはるのであつた。

けれども、お雪さんは、如何にも平和に心地好ささうに、其の白の麻手巾の下に眠つて居る。櫻實は、黒く滴る許り、甘さうに皿の上に置かれ、衣服は新しく綺麗で、瓶の中の水は、日の光を受けて如何にも冷たさうに輝いてゐる。そして私は如何に楽しく感じたであらう！

『什麼したら宜いんだらう？』斯う我と我身に尋ねるのであつた。

『私が幸福であるといふ事は非難すべき事であらうか？ 縦令然うであるにしても如何して妾の幸福を他人に分配して遣ふことが出来やう？』そして如何して又誰に、私といふ者と私の幸福とを與へれば可いのであらう？……』

『仰つしやる通りです。』と片眼を瞬きして強ひて落ち着いてる様子を見せかけるのであつた。

『だが併し、何故貴女はお雪さんの鼻を打つのです?』

村岡さんを打腫りながら菩提樹の枝を振り廻してゐる間に、お雪さんの手巾を拂ひ落して、葉で其の顔を擦つてゐたのに私は氣が付かなかつた。

私は聲高く笑つた。そして今度は、

『だけどね、お雪さんは必然睡つてゐなかつたのだと言ひ張るでせうよ。』とお雪さんを覺すまいとして心を配つてゐるかのやうに、小聲で私は言つた。けれども其れは眞の理由で無かつた。小聲で此の方と話すのが私には嬉しいといふ唯其れだけのことであつた。

村岡さんは唇を動かした。私が聞取れぬ程小聲で話しかけたかの如く私を眞似るのであつた。

それから櫻實の皿を見て、密然と盗む様に其れを取つて、菩提樹下の園ちやんの所へ行つて、不注意にも人形の上に坐るのであつた。園ちやんは最初は腹を立てたが、やがて村岡さんは、兩人の中何方が澤山櫻實を食べられるか競争を試りませうと言つて仲直りをしてしまつた。

『何ならもつと持つて参りませうか、それとも貴郎御自身で取つて來なさいますの?』と私は言つた。

村岡さんは空になつた皿を取つて人形を其の上に乗せ、兩人は並んで園の方へ行つた。園ちやんは笑ひながら村岡さんの後追驅けて來て、人形を返させやうと外衣を曳張るのであつた。人形を返して置いて、村岡さんは眞面目腐つて私を振り返つた。

『松子さん、貴女は董でないでせうか?』斯う物柔かに、恰も尙は誰かを覺醒すのを氣遣ふかのやうに、

『あらゆる塵埃、あらゆる熱さ、あらゆる仕事の後で、さて貴女の所へ来て見ると、直ぐ堇の馨がするのです。……けれども彼の橐駝師に作られて強い馨のするのではなくて、初めは人に知られず謙遜しく芽を出し、雪の斑消に、春草の中に匂ふ野の堇です。』

『おや左様？ ですが收穫は如何になりました？』此の方の言葉に依つて起る嬉しい當惑を隠蔽さうとて斯う私は尋ねた。

『それはもう非常です。如何を貴女が御見かけなさらうと、百姓達は實に見上げたものです。僕は彼等を解すれば解する程、彼等が好きになつて來ます。』
『え、丁度先刻でした。貴郎が來らつしやる前に、私は庭から百姓達の仕事を覚えてゐましたの、そして大變恥かしかつたんですわ、皆が働いてるのに私ばかり氣樂に斯うして何も爲ないのですから……』

『輕々しく左様お考へなすつても不可ません。』と私を遮つて、急に眞面目に

なつたが、尙ほ親しげに私を見詰めて、

『其のお考は神聖なものです、だが……神よ妙齡き松子さんに斯かる思想を御與へなさらぬやうに……』

『あら、私は唯一寸感じた事を貴郎にお話し申したばかりですわ。』

『はい了解りました。ですが什麼して櫻實を採りませう？』

園には鍵が掛つてゐた。そして近邊には、園丁一人も居ない。——皆畑へ行つてゐた。——園ちやんは鍵を持つて來るとて家へ走つた。けれども村岡さんは、其れを待たないで一方の隅から登り、網を上げて内側へ飛び下りた。
『些し上げませうか、皿を御貸しなさい、』と中から言ふのが聞える。

『いゝえ、私自分で採りますわ、私鍵を持つて参りませう。園ちやんは見付けないのか知ら……』

然し乍ら、此の瞬間に於て、村岡さんが、誰も見て居る者は無いと思つて

ひなさる時、彼處で一體、什麼な態度をしてひなさるだらう、什麼な顔をしてひなさるか知らん。斯んな事を知りたいと云ふ強い欲求が、此の瞬間に於て油然と私の心に湧くのであつた。即ち此の時には、一瞬間と雖も村岡さんを見失ひたくなかつた。私は葎麻の上を爪先で歩んで、圍の他の側へ忍び行き、空の桶の上に立つて見ると、圍は丁度私の胸の下になつて、中が一目に見えた。

私は圍の中を殘らず見渡した。古い節立つた木、其の廣い歯牙状の葉が見え、其の下に、重げに、真直に、滴るばかり甘さうな黒い櫻實が垂れ懸つてゐる。網の下に頭を潜らせて、私は村岡さんが櫻の老木の下に立つてるのを認めた。

私かもう既に去つて了つて、誰も見てゐる者は無いと村岡さんは思つて居られるやうである。帽子を脱ぎ眼を閉ぢ、老樹の叉に腰掛けて、忙しげに櫻

の樹脂を小さい球に丸めてゐた。と、急に肩を揺振り、眼をぱちり開き、何か獨語ちて微笑んだ。其の言つた言葉と云へ、微笑と云へ、決して普通ではなかつたので、窺き見たのを私は甚くも後悔した。村岡さんは小聲で『松ちゃん』と言つたやうに思はれた。

『そんな筈は無い。』と心の中で斯う言ふと、

『懐しの松ちゃん』と、一層優しく親しげに、村岡さんは繰返した。此の語は實際明瞭と聞えたのである。私の心臓は激しく鼓動し、今まで曾て経験せぬ、夢かとも思はれる喜悅が背と身に迫るのを覺えて、倒れて心を見破られないやうにと、両手で固く垣に掴つたのである。其の音を聞いて村岡さんは愕然上を見上げ、そして急に眼を落し真赤になつて小兒如たに羞恥むのであつた。

村岡さんは何か私に言はうとしたが駄目であつた。そして顔は愈々熱ら

しかつた。が、再び私を見て心から微笑し、私も亦微笑んだ。
村岡さんの顔中は嬉しさに溢れてゐる。

最早私に氣詰りな、私に説教する小父さんではない。私には目上の方でもなければ、さりとて目下の人でもない。私を戀し私を恐れる人である。そして又私は此の人を恐れ且つ愛するのであつた。

兩人は何も言はないで、御互に眺め合つて居た。然し急に村岡さんは眉を擡めた。微笑と光明は眼から消え失せ、私に對する態度は再び元の冷淡に歸り、父さんらしくなつた。兩人が何か悪い事でもしたかのやう、村岡さんが先づ我に歸つて、私にも我に歸るやうに勸めるかのやう。

『貴女下りたが宜いでせう、落ちると負傷しますよ。そして髪を撫でつけちや如何です、何様に見えやうと一向御構ひなしですね。』

『何故偽善な真似を爲さるのだらう、何が不足で私の感情を害さうと爲なさ

るのか知ら。腹立ちまぎれに斯う私は思つた。と其の瞬間に、私は尙う一度村岡さんを困らせ、私の力を此の人に及ぼして見やうとの抵抗し難い欲求に襲はれたのである。

『いゝえ、私自分で採りたいわ。』斯う言つて、幸ひ直ぐ手近にあつた枝を握つて塀の上に立ち、そして園の中へ下り立つた。私が塀から下へ飛び下りる時、村岡さんは私を助けやうともしなかつた。

『何と云ふ馬鹿な真似をなさるんだ！』再び顔を赤くして、さも困つたと云ふ風を見せて、心の中の悪さを隠蔽さうとして叫んだ。

『それ御覽、負傷をしますつたかも知れん。如何して此處から出る心算です？』

以前にも増して、益々當惑なすつた様子である。けれども今度は私を喜ばすと云ふより寧ろ恐がらすのであつた。そして又其の様子といふのが傳染性

を有つてゐた。私は顔を赧め、村岡さんから少し遠かり、何と言つて宜いやら分らんで、入れる器は持つてゐないが櫻實を摘み始めた。私は我身を責め、後悔し、恐怖れた。私は軽卒な行爲から、永久に村岡さんの敬愛を失つたやうに思はれる。兩人共何の言葉も無い。沈黙は實にも心苦しいものであつた。園ちやんは鍵を手にして驅けて来て、此の窮屈を除いて呉れた。が雙方から言葉を交へたのは、其れから較や少時経つてからで、そして私は村岡さんが斯うく仰つしやつて、私を叱りなすつたと園ちやんに話した。

私等はお雪さんの所へ歸つた。お雪さんは『睡眠つてゐたのではありません、何も彼も皆聴いてゐました。』と言つて笑つた。村岡さんは又、例の父さんらしい、口調を敢て試みたのであつたが、併し爾うするには既う村岡さんの心の状態が餘程適當せぬやうになつてゐるらしかつた。私は此の時、此の事の有つた四五日前、私等の間に取交された會話の尤も生々した記憶を呼び

起すのであつた。

お雪さんは、男子が戀し、又戀を發表する事は、婦人に比べて餘程容易いと言つて、

『男子は戀してゐると言ふことが出來ますが、婦女は出來ませぬね。』と言ふと、村岡さんは其の言葉を受けて、

『併し僕は斯う考へますな、男子たる者は戀してゐるとは言ふべきものでなくて、又言つてはならぬものであると。』と言つた。

『何故左様で御座いますの？』と私は尋いた。

『何故と云ふに、それは常に虚偽だからです。男子が戀してゐると云ふ事は何たる發見でせう？ 此の事を言ふや否や、言はゞ一種の門が引かれるやうなもので、其の人は奴隷——戀に陥るのです。斯う言ふや直ぐ或る奇蹟が必然起るに違ひないし、又大砲の一齊射撃が一時に發せられるやうな、稀有

の現象が生ずるに定つてゐるやうです。そして僕には斯う思はれますな。』と
一、句切りして、

『私は愛しますと嚴かに宣告した人は、其れで自分を欺くことは勿論ですが、
更に悪い事には他人までも欺きます。』

『では婦女は如何して愛されてゐることが解りませう、若し言つて聞かせら
れないとすれば。』とお雪さんが尋ねた。

『私は能く知りません。』斯う答へて、

『誰も自己特有の言ひ方が有るものです。併し此れは感情であつて、又感情
として發表すべきものです。小説を讀む毎に僕は常に想像します、僕は貴嬢
を愛しますエレオノラさん！』と言ふ瞬間に於て、ストレルスキ中尉即ちア
ルフレッドが什麼に狼狽した顔をしたでせう。彼は必然何か意外の結果が
起るに違ひないと思つたのです。が彼にもエレオノラにも何も起らなかつた。

依然兩人は同じ眼、同じ鼻、いや萬事が元の如く同じだつたのです。』

此の戲謔の底には、私に關する或る眞面目な意味が有ると私は感じた。け
れとお雪さんは小説の主人公と譯もなく比べられるのが不平であつた。

『何時も詭辯を御吐きなされるのね、は、は、は、。ですが村岡さん、正直に仰
つしやつて下さいな、貴郎は愛してゐると云ふ事を婦人の方にお言ひなすつ
たことは無いのですか。』

『有りません。僕は未だ嘗て婦人の前で膝を折つたことは一度も有りませ
ん。』斯う言つて笑ひながら、

『そして今後とても無いでせう。』

『確に左様だわ。村岡さんが私を愛してゐなされることを私に言ふ必要は無い
わ。』顯然と彼の時の會話を喚び起して、心の中で斯う私は言つた。

『村岡さんは私を愛し、私は其れを知つてゐる。で如何に村岡さんが焦慮り

に焦慮つて平氣を装つても、私の眼に蓋をすることは出来ないわ。』

とは云へ、彼の櫻樹の園の中へ、無理に飛び下りた自分の罪深い行爲に依つて、如何に私は心を苦しめたことであらう！ 其の結果村岡さんの尊敬を失ひ、屹度私を怒つてゐなさらうと考へるのであつた。

此の夕村岡さんは、私に物言ふことが少なかつた。併しお雪さんや園ちやんに話す言葉、態度、眼指には、悉く愛が籠つてゐるのを見出した。そして此れが誤認でないのであつた。私は其れが苦痛で且つ御氣の毒であつた。村岡さんは何故眞情を伴ひ、又無頓着な風をする必要が有ると考へなさらうのだらう。

晚餐の後で私はピアノへ行つた。岡村さんは私に隨いて來た。

「何か弾つて下さい、若干日聴きませんでした。」

客間で私に追ひ着いて言つた。

「え、唯今……村岡さん！」急に眞直に其の眼を見入つて叫んで、

「貴郎御迷惑では無くつて？」

「迷惑？ 何故迷惑です？」

「何故つて、午後、私貴郎の御好きなさらん事を爲しましたわ。』顔を赤めて私は言つた。

村岡さんは了解し、點頭き、そして笑つた。其の眼は、幾らか怒りもしたのだが、併し別段深く此れに就いて感じた譯ではないと私に言ふのであつた。

「私のお轉婆が御心に障つても、もう勘辨して下さいましたわね。矢張りまた御友達ですわね、ね左様でせう。』斯う言つて私はピアノに著席した。

「仰つしやる通りです」

大きい高い客間は、ピアノの上の唯二本の蠟燭が照らしてゐる。其の他の場所は眞暗である。すがくしい夏の夜氣は、開いてる窓から流れ込む。物

皆聲を收めてゐる中に、唯時々お雪さんの足音が、暗い應接間を往來するにつれて聞え、窓の下に繋がれてゐる村岡さんの馬が、低く呻いて蹄で芝生を踏み鳴らすのが聞えた。

村岡さんは私の後に坐つて居るから見る事が出来ない。併し室内に満ちてる至感情の中に——オルガンの響の中に、私の心の中に、村岡さんの居られるのを感じた。有らゆる眼指、有らゆる身の動きは、縦合見ないでも私の胸には明かであつた。

私はモツアルトのソナタ、ファンタシアを弾いた。これは村岡さんが私に齎つて来て下されたので、其の指揮の下に、且つは主として村岡さんの爲めに學んだのである。私は此の時何を弾いてるのか全く無意識であつたが、併し巧みに弾いたに違ひない。村岡さんが満足なさつたことは確からしかつた。此の方が経験しつゝあつた喜びを私は認めた。私は其の顔を眺めはしないが、

又私の後には居られたものゝ、それでも私を見守つた其の面貌を、心の中に描くことが能たのである。

全く我を忘れて、器械的に鍵を探りつゞけて居る間に、周囲を見廻してちらと村岡さんを見た。其の頭は明るい背景の中に圖取られてゐた。頭を手に支へて、輝く眼でじいつと私を見詰めてゐた。

顔を見た時微笑んで調べを止めた。村岡さんも私を見て莞爾、私に尙ほ弾くやうにと、譜に和せて、答めるかの如く頷くやうにするのであつた。

了ると既に高く昇つた月影は部屋に差し込み、其の銀色の光を以て床を流れてゐる。

其處へ入つて来たお雪さんは、最も佳い所で止すとは私に取つて恥づべき事であると言ひ、又非常に巧みには弾かなかつたと主張したが、村岡さんは今晚位上手に弾いたことは無いと云ふ意見だつた。そして部屋を彼方此方、

客間から暗い應接間へと歩いて行き、再び歸つて来る。其の度に私を見返り、そして微笑む。私も亦微笑む。そして笑ひたいやうにさへ思つた。別に如何と云ふ理由も無いけれど、——此の日に起り来る何物にも私は實に嬉しかつたのである。

村岡さんが戸に隠れて見えなくなると、ピアノ近くに居るお雪さんを捉まへて、一番好きな場所、肥えた頸、頸の下を接吻した。やがて其の人が歸つて来ると急に真面目な顔をして、微笑むまいと努めるのであつた。

「松ちゃんは今如何したんでせう。」お雪さんは尋いた。けれども村岡さんは返事をせず、唯私の方を見てくすくす笑ふばかり、此の方は何が私に起つたか知つて居られるのである。

「まあ御覧、何と云ふ美しい夜でせう。」と應接間から斯う言つた。庭の方に開いてる出窓の前に村岡さんは立つてゐるのである。

私達も窓口に行つた。實に未だ嘗て見たこともない様な夜であつた。満月は我等の後、家の真上に懸つてゐる。其れ故に今月は見えない。屋根や柱の影の半分、觀臺の日除の影が、斜に短くなつて砂を布いた小徑や卵形の草地の上に横つてゐる。其の他は皆明るくて、銀色なせる露に輝いてる月の光に浮んで見える。花壇の間に廣い道がある。此の道を横断つて一方に、天笠牡丹や其の支棒やの傾いた影が這つてゐる。そして其の道がすうつと向方へ延びて、鮮かに又冷かに、燦々と光る小石に輝いて、未は霧の彼方に没れて了ふ。木の下蔭には、温室の光り輝く硝子屋根が見え、溪谷からは断えず霧が立ち昇るのであつた。紫丁香の静かな藪の、此處には未だ花の咲かないのが月の光を浴びてゐる。總ての花は露に濡れて一々見分けられるのである。光と陰とは列樹道に於て互に紛糾錯雜して、其れは恰も木と道とから成つてゐるのではなくして彼方此方に搖ぎ漂ふ透明の家でも在るかのやうに見えた。

右手の方、家の陰になる處は、全く暗く朦朧として、怪しげに見えた。けれど、闇黒との対照上愈々顯著と、彼の白楊の妙な枝葉が、家の近くに不思議にも吊されてるやうに思はれ、そして其の梢は皎々たる月光を浴びて、今しも遠く〜静かな青い空に飛び行くのではないかと思はれた。

「戸外へ出て見ませうよ。」と私は言つた。

お雪さんは同意したが、套靴を穿くやうにと言ふのであつた。

「其れにも及ばないわ、ね、村岡さんが手を貸して下さるわ。」

丁度其れが私の足の濡れるのを防ぐかのやう！

村岡さんは手を差出さなかつたが、私の方から其の手を取つて、而も少しも村岡さんを驚かさなかつたのである。兩人は相並んで丘へと行く。此の世界、此の空、此の庭園、此の空氣は、皆是れ最早常に私が知つたものと同じには見えなかつた。

私達が歩み行く列樹道に沿うて眺めた時、私には斯う思はれた。我等は此れ以上進めない、彼方には可能の世界は終りを告げ、今我が眼に見る凡ての此の光景は、永劫に變せず其の美に停止るのであらうと。

然り乍ら我等は依然進みつゝある。美の魔術的幻影の壁は次第に遠かつて我等の道を開いて呉れる。其處には實際我等の庭も木も道も、乾ける木の葉も、凡てが私に能く知られてゐるのである。我等は單に道に沿うて歩み、光と影との圓を踏み行きつゝあつた。足の下には乾き果つた木の葉がガサ／＼と鳴り、冷かなる微風が私の顔を扇ぐばかり。斯くして、静かに私の傍を緩き歩調で歩むとき、極めて慎ましげに其の手に私の手を托させて呉れた人は別人ならぬ彼の人である。そして遅々と歩みながら、我等の後に随つたのはお雪さんであつた。空には月より外に何も無い、搖ぎもせぬ枝から洩れて、光を我等の上に投げつゝ……。

されど一歩一歩と彼の魔術的幻影の壁は前に後に近くやうに思はれ、我等は更に遠く行かれるか否うかと危懼まれて、我等を取巻く萬物の現實を信ずるのには依然困難の事であつた。

「おや！蛙が——」お雪さんは叫んだ。

「誰が言つたのか知ら、そして何故叫んだのだらう？」と私は心の中で問うた。然し直ぐ様、其れはお雪さんで、蛙を恐がつてゐるからだと思つて自分も地上を見遣るのであつた。すると小さい蛙が、私の前で一度飛び上つて、そして黙然として居る。と其の小やかな影が、光る粘土の道の縁にあつた。「貴女蛙は恐くないですか。」と村岡さんが尋ねた。私はちらと其の顔を視た。列樹の菩提樹の一本が切り倒され、我等が過ぎ行く此の道の上にて、村岡さんの半身は月の光に皎々と照らされた。

村岡さんは「貴女恐くないですか。」と言はれたが、其の言葉にはより深い

意味が有つた。

「我は卿を愛す、床し乙女よ、我は卿を愛す。」と言ふのを聞いた。

村岡さんの眼、村岡さんの腕は斯う言つた。そして周囲の光、影、空氣、

否有りとは有らゆるものは悉く斯う繰返すのであつた。

三人は庭園を一周りした。お雪さんは私達の後からちよこく小足に歩み、其れでも骨が折れると見えて呼吸切れがする様子であつた。そしてもう歸る時刻ですと言つた。私は氣の毒に思つた、何と云ふ同情すべき人だらう！

「何故お雪さんは兩人のやうに感じないのか知ら？ 何故總ての人は若く幸

福でないだらう？ 今夜のやうに又我等兩人のやうに。」

三人は家に歸つた。随分と夜が更けたにも拘はらず村岡さんは暇乞をなさらぬ。家の者は皆眠つても、馬が堪へ切れなさうに蹄を踏み鳴らし續けて窓の下で嘶いても。そしてお雪さんももう遅いといふ事を言はない。で種々

の話をしながら坐つたまゝ、疾に朝の三時が過ぎたことも打忘れてゐたのであつた。

雄鶏は三番鶏を鳴き始めた。そして空に夜明け前のか弱い色が見え初むる頃村岡さんは辭し去つた。平常のやうに、何も際立つた事を言ふでもなく別れたのであるが、私は此の時から村岡さんは私のもので、決して失つてはならぬことを能く知つた。「私は彼の方を愛する」と心の中で白状して、お雪さんに残らず打明けた。お雪さんは大層喜び、且つ又私が打明けて話したといふ事に餘程動かされた様子である。其の後でお雪さんは幾らか眠ることが出来た。私は其れに反して、觀臺に上り、庭に行き、又我等が共に通過した彼の列樹道を歩んで見たのである。

此の夜私は些しも眠らずに明かした。そして生れて初めて日出の光景を精く見たのである。私は未だ嘗て斯かる夜明け、斯かる朝を経験したことが無い。

「併し何故だらう？ 何故彼の方は簡単に私を愛してゐると言つて下さらぬのか知らず？ 何故其れを困難な事と想像するのだらう。何故彼の方は御自分を老人らしく言ひ做すのか知ら。萬事彼の様に男らしく立派なのに、何で彼の様にして男性の黄金時代をむざむざ送過すのであらう、恐らく二度と歸つて來はしません。『僕は貴女を愛します。』と言はせたい、唯其の一語を言はせたい。私の手を其の手に取り、唇に押當て、『僕は貴女を愛します。』とさへ言へば、萬事が濟んで了ふのである。彼の方に其れだけの勇氣が無いのだらうか。……だけど、若し私が間違つて、彼の方が私を愛して居られないのなら……」

斯う云ふ考が、私の心一ぱいに浮んで來た。

私は私の上に覆ひ被さつて來た力強い感情に驚いた。神は其れが何處に私を導くかを知つて居られる。私は私が彼の方の居られた園の中へ飛び下りた

時の、彼の方の當惑と自分の當惑とを記憶に喚び起して、心苦しく頼りなくなつて来た。涙は眼に溢れ、跪いて祈禱を捧げた。すると又、平和と希望との不思議な感情が胸に充ちて来るのであつた。私は今日から精進をし、私の誕生日に聖餐式を享け、其の當日に彼の方の本心を聴き取らうと心に決めた。其れは何故？ 如何して其れが遂げられやう？ 私には何等の考慮とても無いが、此の時から私の信念は確固として、此の事は私の思ひ通りになるだらうと知つたのであつた。

最早全く夜は明けて、家内の者は起き始めてゐた。其の時私は私の部屋へと行つた。

四

聖母昇天祭前の齋期なので、家では誰も此の間聖晩餐式の用意をする私の

決心を怪しまなかつた。

此の週間には、村岡さんは一度も訪れなかつた。然し私は驚きもせねば慌てもせぬ。そして心を痛めることも無いのみか、却つて来て下さらぬのが嬉しかつた。斯うして私の誕生日に屹度来て戴きたいと一向に待ち設けてゐた。

此の週間は、私は毎朝早く起き、人々が馬に馬具を着けてゐる間、唯獨り庭を漫步ひ、前日行つた罪を瞑想し、現在の日々に満足して一層深く罪に陥ることの無いやうに、今日將に何を爲すべきかと考へるのが常であつた。

其の時、絶対に罪を免れるのは極めて容易い事のやうに思はれた。必要なは唯試るにありと私は考へた。馬の用意が整ふと、私はお雪さんか、左もなくば婢女の一人を連れ、二人乗の馬車に乗つて教會迄三十町馬を驅るのであつた。教會に入ると私は毎時思ひ出す、敬神の念を抱いて来る總ての人々の爲めに、此處で祈禱が捧げられるのであると。そして此の感情の影響

を受けて、玄關の二つの階段を登るのが心苦しかった。

此頃は教會には、聖餐式の用意をしてゐる百姓又は雇人達は十人以上は居ない。そして私は此の人達の挨拶には極めて丁寧に応へやうと努めた。それから自分で蠟燭棚の處へ行つて、堂守を勤めてゐる老兵士の手から蠟燭を受け取り、此れをば聖母の像の前に立てた。そして是が實に重大なる行爲のやうに思はれたのである。

奥院の扉の間から、私の母さんが縫宿した祭壇掛が見える。扉の上に、飾りの星で燦爛たる二人の天使が居る。此れは私の小兒の時に非常に大きく見えたとのであるが、其の外に私の小兒らしき注意を奪つた黄色の後光のある鳩が居る。

内陣格子の後に模造の洗禮盤が見える。其の傍で、私が屢ば吾家の下男の子供の名親となり、又私も其處で洗禮を受けたのである。

年老いた坊さんが袈裟を着て出て來られた。そして以前と全く同じ調子を以て御經を誦まれた。此の調子は、私等の家で、園ちゃんの時や、父さんの鎮魂祭供養の時や、又母さんの葬式の時に、早くから私の記憶に残つてゐるものであつた。

坊さんの顛へる聲も、合誦者の間に反響する時は同じ調子であつた。そして其處には私が會堂で何時も見受けるやうに記憶してゐる例の婆さんが居た。此の人は祈禱の時になると、恭しく頭を下げ、眼には涙を浮べて、内陣の中にある聖像を眺め、握り緊めた手を色の褪めた肩掛に押附け、何かくどくど齒の無い口で祈禱を捧げるのであつた。

私は述べられた祈禱の一句一句に耳を傾け、私の感情を以て此れに答へやうと努めた。そして其の全き深さを測り兼ねた時には、心の中に私の心を開發して下さるやう神に願ふか、又は私が解し得なかつた祈禱の代りに、私一

個の祈禱を心の中で獨語くのであつた。

懺悔の祈禱が捧げられた時、私は過去を回想した。そして彼の小兒らしい無邪氣な過去と、現在の精神状態とを比較して非常に暗黒に感じたので、私は泣き且つ身顛ひした。けれど同時に又、行爲に穢れなき私には總ての罪は赦され、そして若し私の罪が大であればある程、私の懺悔は其れにつれて愈々心を清々しくするだらうと感じたのである。

祈禱の終結に坊さんが『神の恵が彼女の上にあるやうに』と言はれた時、感謝を伴ふ快感が直ちに我身を占領するやうに思はれ、言はれ或る一種の光明と同情との獨特の感が突然胸の中に流れ入るのであつた。

祈禱が済むと坊さんは私の所へ来て、貴女の御家で晩の祈禱をなさつては如何です、そして何時行きませうと尋ねた。私は慇懃に其の申し出を感謝した、坊さんが注意して下さつたのは眞に私の爲めを思へばこそであるから。

然し私は矢張り自身此處へ来るか、又は召使を寄越すか何れかにする旨を答へた。

參詣の後は、——若しお雪さんと一緒でない折は何時も馬車は前に家へ還して置くので婢女を随へて徒歩で歸り、會ふ人毎に丁寧に御辭儀をし、何か善行を爲し、忠告を與へ、人の爲めに身を犠牲にして見たいと思ひ、荷物を舉げる手助けをし、小兒を揺振つて遣り、或は人に道を譲る爲めに泥の中をも厭はず履み込む機會を見出さうと心掛けてゐた。

或る夕方の事、執事がお雪さんに話すのを聞けば、吾家の小作をしてゐる百姓の一人なる清吉が、昨夜死んだ娘の棺を拵へる板と、供養の錢を少し許り貰ひたいと言つて来て、執事が呉れて遣つたと云ふ事である。私は尋いた。

『おや、其んなに貧乏なの？』

『大變貧乏です、充分食へることさへ出来ぬ位です。』と執事が答へた。

何か知らぬ或る力が私の胸を掴むやうに思はれると同時に、此れを聞いて一種の勇氣を感じたのである。私は一寸散歩に出るとお雪さんに言つて置いて、上階に走り上り、自分の錢を悉く——非常に僅少だが其れでも自分の有つてゐる限り——集め、それから十字を結んで、獨り庭を過ぎ丘を横切つて村に入り、清吉の矮屋へ行つて見た。

此の家は村の端にある。私は誰にも見付けられないで窓の處へ行き、窓框の上に錢を載せて硝子を軽く叩いた。

誰か矮屋から出て来た、戸を蝶番の所でキイ／＼鳴はせながら。そして私の方へ呼びかけた。けれども私は顔へながら恐さに固くなつて、犯罪人のやうに遑て、家路を向して駆け出したのである。

お雪さんは私が今迄何處にゐてそして如何したのかと尋いたが、私はお雪

さんの尋ねる事を了解しやうともせず、一言の答もしなかつた。そして急に自分が、詰らぬ取るに足らぬ事を爲て来たやうに思はれた。そこで部屋に閉籠つて、暫時の間、何を爲ることも、考へることも、自分の感情を辯解することも出来なくて、無意識に彼方此方を歩くのであつた。

やがて私は、清吉の全家族が感ずる喜びと、彼等が錢を與れた人に浴びせかける感謝とに就いて考を馳せた。で自分で手づから遣らなかつたことを氣の毒に思ふやうになつた。

私は又、村岡さんが此の事を知つたら何と言はれるだらうと考へ、愚しい真似をする女だと思ひはしなからうかと氣に懸かつて、誰も此の事知らぬのに安心した。

結局此の事は私には一種の喜びであつた。そして萬物悉く、私も含めて總て憐れむべき賤しむべく見えても、然も私の身の上、及び周圍の有らゆる物

を同情を以て見たから、死の觀念も私の前には幸福の幻影のやうに現はれた。私は微笑み、祈禱し、そして泣いた。嗚呼此の瞬間に於て、我身及び世界の有らゆる人に對する、如何に切なる愛を私は感じたであらう！

私は祈禱書にある福音を読む。讀めば讀む程漸々意味が明かになり、靈的生活の話が愈々我身を牽着けるやうに、而も其れが至極簡單な事のやうに思はれ、此の教義の中にある深い感情とか思想とかい、益々け高く仰ぐべきものと思はれて來た。のみならず、此の理由から、如何に萬事が明瞭に簡易に私に見えたであらう。其の書を伏せて、再び私の思想觀察を周圍の人生に向けた時に。

私には斯う思はれた。正しく生活しないことは随分辛いもので、萬人を愛し、萬人に愛せられるのは極めて易々たる事である。誰も皆私には寔に親切で懐かしい。私が御稽古の先生をして遣つてゐる園ちやんまでが、此頃は全

く異つて來て、私を解し、私を満足させ、苦勞をさせまいとするのであつた。私が人に對する如く、人も私に對して呉れた。私は私と仲の悪い人で、懺悔して其の人の赦罪を願ふべき人を思ひ廻らす時に、唯一人、近所の若い淑女を思ひ出したのである。一年前に、お客様の前で私はその方を笑つたことが有る。それから後、私を訪れるのを止しなかつた。私は手紙を上げて過失を白狀し、赦免を願つた。すると直に返事が來て、其の事を赦し、又此方からも貴女の御赦しを願ひたいと言はれた。此の返事を讀んだ時、嬉しさの餘り私は泣いたのである。

『何故人は皆斯様に私に親切でせう、斯かる愛に値すべき何事を私は爲したでせう。』斯う心の中で尋ねた。そして我知らず村岡さんを思ひ出し、暫しは此の人に就いて思を馳せた。私は自分と此の人とを別には出来なかつた、且つ其れを罪だとは思はなかつた。初めて私は、自分が村岡さんを戀してゐる

と認められた彼の晩とは全然違つた仕方だ、今此の方の事を考へてゐる。我身に就いて考へるが如く村岡さんに就いて考へた。すると自然村岡さんは私の未來に關する計畫の中に入つて來るのであつた。

村岡さんが目の前に居られぬので、私に加へる彼の卓越した印象が私の想像には跡もなく消え失せ、今は自分も彼の方と同一の地位にゐることを感じ、私が登り詰めた精神状態の高所から、全く村岡さんを解したのである。今迄此の方に就いて奇異に思はれた點も今は明瞭になつて來た。初めて私は、何故村岡さんが幸福は唯他人の爲めに生きるに存すると言はれたか了解つて、今は全く村岡さんと同意見である。我等は互に永久に平穩に幸福であるやうに思はれ、外國への旅行とか、愉快なる交際社會とか、或は華麗な生活とかの考は少しも起らないで、全く異つた——田舎に於ける安靜な家庭生活で、常に自分を犠牲にし、常に相互の間に愛情があり、何物にも親切に、頼

みに思ふ神を認める生活を冀ふのであつた。

私の豫定通り誕生日に聖餐式を享けた。此の日教會から歸つた時、私の胸は幸福の感に充ちて、少しにても斯かる幸福を妨げる有らゆるものを恐れた。が、馬車から下りて階段を登りかけると、見慣れてゐる二輪馬車が橋を渡つてガラ／＼と音がする。と直ぐ村岡さんの顔が見えたのである。村岡さんは私を祝福し、相共に應接室へ通つた。知り合になつて以來、嘗て此の朝の様に穩かに沈着いてゐたことは私には無かつた。私の心の中には今、村岡さんより高い新しい世界があつて、是を村岡さんは御存しないのだ。此の方の面前にゐても、更に窮屈に感じない。然し此の事を、村岡さんも幾分御分りになつてゐたかも知れぬ、と言ふのは、私に對して如何にも丁寧に優しくして下され、一種宗教的の心持を以て私を待遇つて下さつたから。私はピアノへ行つた、けれども村岡さんは其の蓋を閉め、鍵を衣囊に入れてしまつた。

『今の貴女の御機嫌を大切にせねば不可ません、貴女の問題は如何なる地上の音楽より以上に調和を保つてゐます。』

私は村岡さんの考深いのに感謝した。が同時に聊か失望せざるを得なかつた。此の方は餘りに容易に餘りに明白に、私一個の心に秘密を保つて置くべき事柄を讀んでしまつたのである。

晝餐の後で、村岡さんは私を御祝ひに來たのであると言ひ、其れと同時に明日莫斯科へ行くから『左様なら』を言ひに訪れたのであると言はれた。斯う言つてお雪さんの顔を眺め、それから私に偷むが如き一瞥を與へた。私は此の方が私の顔に現はれる情緒に觸れるのを、如何に恐がつて居られるかを見た。

私は驚きもせねば胸を痛めもしない。永く彼方に居られるのか否うか、其れさへも尋かない。何とか仰つしやるだらう、そして行きなさらぬだらうと

知つたのである。

什麼して知つたかは現在に至つても會得することが出来ない。併し彼の記憶すべき日に於ては、何事でも知り得るやうに思はれた。過去は如何だつた、未來は如何なると、何でもあれ知ることが難くないやうに思はれた。私は幸福なる夢の中に居る様な氣がして、其の時は未だ起らない物事が既に存在してゐるやうに感ぜられ、其れが後には人の智識の一部分となるやうに思はれて、而も萬事は必然起り來る筈で、人は皆其の起り來ることを了解してゐるらしかつた。

食事の後、お雪さんは御勤めの疲勞で暫時寝つたので、村岡さんは其の睡眠の覺める迄、『左様なら』を言ふ爲めに待たなければならなかつた。

太陽は眩く客間に射込んだ。兩人は丘へと出た。腰を下すと直ぐ極めて穩かに、我が愛の未來を決定するに關係ある會話を始めたのである。坐つた其

の瞬間、遅くもなく早くもなく言ひ出したのであるから、此の時は我等の話に異つた調子や特性を興へるものも無ければ、私が言はうと思つた事を妨げるものも無かつた。私でさへ私に印象を興へた安静、決心、精確が、一體何處から來たのか解するに苦んだ。恰も私の心に囁くのは私自身ではなくて、私の意志から獨立した何かであるかのやう。

村岡さんは私の前に座を占めて、紫丁香の枝を引き寄せ、葉を摘み始めた。私が話し出すとき、枝を放棄つて手で頭を支へた。此れは、全く心が沈着しているか、左も無くば餘程心の亂れてる人の態度であつたかも知れぬ。

「何故貴郎は莫斯科へ行らつしやるの？」と意味有り氣な調子で沈着いて尋ね、そして正面に見入つた。

村岡さんは直ぐには答へなかつた。

「用事があつて。」眼を落しながら斯う言つた。

斯んなに打解けた質問に答へるに方つて、私に虚偽を言ふのは什麼に辛い事だらう。

「ね、村岡さん、今日は私には如何な日か御承知でせう。種々の方面から今日は大切な日です。私が御尋ねするのは單に御世辭からではありません、左様では無くて、知らねばならぬから問くのですね。何故行らつしやるの？」
 「此れに關いて、事實を御話し申すことは随分困難です。今週僕は貴女と僕とに就いて種々考へました。で行くのは僕の義務だと云ふ結論に達したので、何故か貴女は御存じでせう、若し僕を御好きなら御尋さならぬやうに。」

村岡さんは手で額を撫で、眼を閉ちて、

「話すことは僕には困難です。……が御了解でせう。」

私の心臓は烈しく動悸を打ち始めた。

『了解りませんわ、了解りません。仰つしやつて下さい、何卒、ね、大人しく皆聴きますわ。』

村岡さんは座を換へ、私をちらと見て、又も紫丁香の枝を引き寄せた。

『其の上に』と暫し沈黙つた後で、強ひて沈着かうとしても不能だつた聲で、『言葉に出すも愚の至りで……第一實に僕には困難な事ですが、ではまあ説明して見ませう。』と、何か肉體上の苦痛を覚えるかの如く眉を蹙めつゝ言つた。

『何卒。』

『まあ、茲に一人の紳士があつたと假定して下さい。此の人を甲と假りに言つて置ませう、年も老けて生活に疲勞れてゐる人です。それから一人の淑女、——乙と言ひませう。若くて幸福で、而も未だ社會と云ふものも人生と云ふものも見たことの無い人です。種々の關係から、初め甲は此の淑女を娘

として愛し、別の意味で愛すると云ふ事は夢にも想像しなかつたのです。』

言つて呼吸を太く吐いた。私は黙つて聽いてゐた。

『併し甲は何時か知ら、乙は非常に年若で、其の人生は未だ飯事のやうなものであると云ふ事を忘れて了つたのです。……それで容易く別な風に愛することを知つたのかも知れぬ。……此の甲自身は欺かれてゐる、急に悔恨のやうな辛い他の感情が其の精神を占領して來たのに氣が付いて驚愕したのです。彼は結局以前の友誼關係が破壊せられはしまいかと心配し、其の破壊せられぬ前に立ち去らうと決心したのです。』

斯う言ひながら、言はゞ無造作らしく手で眼を擦つて閉ぢるのであつた。

『爾う？ 何故甲は別な風に愛するのを恐れるのでせう。』舌が縫れる様な調子で私は言つた。

私は心の騒ぐのを鎮めた。すると私の聲は靜かになつた。けれども村岡さ

んは私が弄戯に言つてるのだと思つた様子であつた。

明かに氣に觸つたのを示す口調で答へた。

「貴女はお若い、僕は最早若くはない。貴女は取り留めない事でも面白がるが、僕は事實に何もかを得なければなりません。貴女の事は貴女の御自由ですが唯僕と一緒になさるゝやうに。でない、僕は深く危懼れます、何か亂暴な真似を行らぬとも限りません。其の時は御氣の毒ですから。此れが甲の言つた事です。」と言葉を切つて、

「さあ、是は皆下らぬ事かも知れません。併し何故僕が行かうとして居るか御了解りませう。もう此れ以上は言はぬことにしませう。」

「いゝえ、もつと話させよう。涙は私の聲を顔はせるのであつた。」

「甲は乙を愛してるのですか愛してゐないのですか。」
答が無い。

「若し愛してゐなかつたなら、何故甲は小兒のやうに乙を弄んだのでせう。」
「左様です、左様です。甲こそ非難すべきであります。」急いで私を遮つて答へて、

「併し結局は友達として別れ……」

「でも残酷だわ！ 何とか外の道は無いのでせうか。」私自らの大膽に驚いた時、殆ど此の言葉の終は口から出なかつた。

「左様です、有ります。」と興奮した顔を隠さうともせず、正面に私を見て言つた。

「其の終局に二つの異つた道が有ります。——中には」と立ち上り、痛ましのげな悲しげな微笑を浮かべて私を見ながら、

「中には甲は白痴になり狂氣の如く乙を戀慕つて、そして其の事を乙に話すと、乙は唯甲を見て笑つたばかりだつたと言ふ人も有ります、……實際乙に

取つて此れは單に面白半分の事せう。が甲には生きるか死ぬかと云ふ大問題です。』

私は身顛ひして、村岡さんの邪魔をし、私の前で其んな事を言ふ権利は無いと言つて遣らうかと思つたが、村岡さんは手を振つて私を制して、

『お止しなさい！』聲は熱して震へてゐる。

『また他の人は斯う言ひます。乙は甲に同情し、乙は——可愛さうに未だ世の中の経験の浅い嬢さんです。——幾らか甲を愛してゐたのかも知れぬ、それで甲の妻になることを承諾したのですと。併し結局矢張り乙は、自分が甲を欺いてゐたことを知るに至り、甲は又自分で自分を欺いてゐたことを知つたのです。もう此れ以上は言はぬことにしませう。』更に話す勇氣も無さうに口を噤み、それから立つて私の前を往きつ戻りつ歩み出したのであつた。

『もう此れ以上は言はぬことにしませう。』と村岡さんは言つた。併し村岡さ

んは精神力の及ぶ限り私の答を待ち設けてゐるのだらうと思つた。何か言はうと思つたが不能だつた。何物か私の胸を壓搾めるやうに感じた。私は村岡さんの顔を見た。青白くて下唇は慄いてる。お氣の毒だと思つた。満身の力を注ぎ、急に我等を繋いでる沈黙の鎖を断ち捨て、弱い中斷れがちな、一秒毎に如何かと氣遣ふ聲で私は言つた。

『ですが、第三の結末も有りますわ。』斯う言つて一寸沈黙つた。けれども村岡さんは唯黙して待つてゐる。

『ねえ、第三の結末も有りますわ。其れは甲が乙を愛さんで、單だ深刻な深刻な苦痛を乙に與へて而も自ら正しい行爲をしたと思ひ、去つて自ら誇とする事です。私の方ではなく、貴郎の方に取り留めのない事が有りますわ。最初の日から私、貴郎を愛してゐます。——眞個に愛してゐますの。』と言ひ切つた。そして愛してゐますと云ふ所で知らずく聲が優しい調子から荒い

叫に變つて自分を驚かしたのである。

村岡さんは私の前に眞蒼になつて立つてゐる。唇は愈々慄き、二三滴の涙は頬を流れるのであつた。

「眞個に残酷だわ！」私は殆ど叫んだ。そして腹立たしい泣かぬ涙に呼吸が窒りはせぬかと恐れた。

「何故行くのです？」斯う言つて村岡さんに別れやうと立ち上つた。

けれども私を去かせさうもない。頭を私の胸の方に傾け、唇は其の人の涙に濡れた私の顫へる手を接吻しつゝあつた。

「宥して下さい、左様と僕が知つて居つたなら！」

「何故行くのです、何故ですか？」と私は繰返した。けれども心は疾うから喜ばしさに一ぱいで、此の喜ばしさを決して私から奪ふことの出来ない、又決して再度と繰返されぬものである。

五分間も経つと園ちやんは、上階のお雪さんの所へ駆けつけて、家中に聞えよがしに、姉さんは村岡さんのお嫁さんになるのよと嘶し立てゝゐた。

五

我等の結婚を延ばす理由は更に無くて、兩人何方も斯かる事を願はない。お雪さんは莫斯科へ行つて婚入道具を調へやうと氣を揉み、村岡さんの母さんは、結婚前に新しい馬車や家具やを買ふやうに勧めた。けれども兩人は、是非とも必要なら後に此等の物を買つた方が宜からうと決め、そして結婚の前祝は、私の誕生日後二週間に擧げられた。——新調の道具も無い、招待の客も無い、花賀附添人も無ければ晩餐も三鞭酒も無い、將又凡ての彼の結婚の慣例的附屬品とても無い。

村岡さんは斯う言はれた。音楽なく、箏笛の山なく、家が全然修築されも

しないで結婚式を挙げると云ふので、母さんは大層機嫌が悪いと。實際村岡さんの母さんの結婚式の模様とは全く異つてゐるさうで、當時は三萬留も要つたと云ふ話。それで母さんが私等の式に役に立つものを見付け出さうとて大熱心で庫の中の篋筒中を捜してゐたと云ふ事や、式に必要な毛氈とか幕とか盆とかに就いては、女中頭のお豊を相談相手にして居られたと云ふ事などを、細々と村岡さんが語られた。

私の家では、お雪さんが年老つた乳母の菊と同様な事をやつてゐる。そして此等の事に關しては、私が自分の所見を言ふことが極必要な事より外は、お雪さんと話をしても何の甲斐も無かつた。お雪さんは、村岡さんと私が未來の事を話し合ふ時には、丁度人が斯んな境遇に在る折に爲ると一般に想像せられる如く、私等は單に甘い感情的な事ばかり語り、愚しい眞似をして悦んでゐるのであると固く信じてゐた。併し其れと同時に、お雪さんは又、將來

に於ける我等の物質的幸福は、襦袢の正しき裁縫と食卓掛や拭布の縁を縫る事に懸つてゐると云ふ事をも確信してゐた。

ボク robes スキとニコルスキとの間に、種々な準備に關して、毎日秘密の使が往來させられた。そして、外面上お雪さんと村岡さんの母さんとが如何にも親密な間であるやうに見えるもの、其の交際は極めて巧な併し稍敵意を含まない外交的應對に依りて續けられて來たのである。

辰子さん——即ち今では一層親密に知り合つた村岡さんの母さんは、几帳面な厳格な士族の奥さんで、一見女大學的の方である。村岡さんは大層母さんを愛してゐる、其れは息子としての義務の爲めのみでなく、其の理解力から、いとも聰明な親切な、世にも愛すべき婦人と考へ、一個の老婦人としても愛したのである。此の人は何時も私共、取り分け私に親切で、自分の息子が私と結婚しやうとしてゐるのを喜んで居られた。併し私が結納の済んだ後

訪問した時には、私は村岡さんに取つて、畢竟最上のお嫁さんではない、そして此の事を豫め含んでゐた方が可からうと、暗に知らしめやうと考へて居られる様子だつた。私は老人といふ者は皆斯うしたものであらうと思ひ、深く氣に留めもしなかつた。

私が處女である最後の二週間は、兩人は毎日必ず會つたのである。午餐に村岡さんは來られて、大抵夜まで居られる。私が無くては生きてることが出来ないと云ひ、私も村岡さんは眞實の事を言つてゐるのだと思つた。併し全一日を私と暮したことは嘗て無い、矢張り御自分の事に何彼と配慮りするのであつた。

私達の表面の關係は、前と同じに結婚當日まで繼續した。兩人は尙互に「あなた」と言つて呼びかけた。村岡さんは私の手すら接吻しない。そして私が見えぬときには強ひて搜すところか、私と二人限りでゐられる機會さへも

避けるやうにした。胸に潜める愛情が汜れ過ぎて危険を醸しはせぬかを恐れるやうに見えた。

村岡さんが變つたか、但しは私が變つたか知らぬが、今は自分で村岡さんと同じ立場に在ることを感じ、其の前に坐る時尊敬と恐怖とを感せしめた人の代りに、幸福の世界に解放された可愛らしい小兒同様の人を見るのであつた。私は心の中で屢ば言つた。

「此の方には驚く程偉い所も無いわ、矢張り單に私と同じ人だわ、其れだけよ。」

私の眼から隠れてゐるものは何も無さうだ。私は残らず知つてゐるらしい。今私を見た所だけでは、村岡さんは非常に單純で又非常に行く私に似てゐる。其の口にする將來の生活方針などさへ多く私の考と一致する程で、唯違つた點は其れが私よりも明瞭に巧妙に言ひ表はされると云ふだけであつた。

此の間の天候は極めて悪く、多くは家の中で過した。最も好ましい最も親しい話は、ピアノと窓との間で取交はされた。蠟燭の光は窓硝子の面で反射し、時々雨粒が是をこつて滴り落ちる。雨は屋根を打つて樋から水溜に濺ぎ、湿氣は窓の邊に瀰漫してゐる。そして此の内と外との對照から、如何に平常よりも眩く、温かさうに、且つ快活らしく其の場所が見えたのであらう。

「知つてお在ですか、僕は永い間貴女に或る事を言はうと思つてたんですが。」と此の場所で或る夕方静かに坐つてゐた時に村岡さんが言はれた。

「貴女が何の氣なしに遊んでる間、僕は始終此の事に就いて考へてゐました。」

「何も仰つしやつて下さいますな、私皆知つて居りますの。」

「然うですか、それでは何も言ひますまい。」

「あら、だけど矢ッ張り聞かせて頂戴、何を言はうと思つて在らしつて？」

と私は尋いた。

「其れは斯うです、——日外甲と乙との話をしたのを貴女覚えてゐますか。」

「彼んな厭な話を覚えてゐるかですつて、彼の話が彼んな風に終まなかつたら大變ですわ。」

「左様です、もう少しの事で僕は僕の幸福を自分で破壊して了ふ所でした。」

「貴女は僕を救つて呉れました。併し要は僕が始終虚偽を言つてゐた事です、そして僕の良心は僕を責め、今こそ貴女に残らず打明けやうと思ふのです。」

「いゝえ、何卒、其れには及びませんわ。」

「何も驚くことは有りません。微笑みながら、」

「僕の望む所は唯實際の僕を御目に懸けたいのです。御話するに方つて僕は先づ理性を以て自分を判断したい。」

「理性ですつて？ 何故ですか？」斯う叫んで、

「其んな必要は、決して有りませんわ。」

「いや、僕は間違つた判断をしたのでした。人生の有らゆる迷と誤解とを脱した後田舎に住むことになつた時、僕は断乎として自分に向つて宣告しました、戀は既に僕に取つては終局を告げた、僕に残つてゐるものは唯今後の生を送り果す義務のみであると。それから餘程経つて僕は、自分の感情が何時か貴女に向つてゐて、又何處に僕を連れ行かうとしてゐるかを認めたのです。僕は希望し且つ失望しました。時には、貴女が愛情を仄かすやうに見える事も有つた。其の時自分の信念が再び立ち歸り、眞に如何すれば宜いやら途方に暮れました。けれど、彼の夕方——御記憶でせう、彼の月の明るい晩庭を歩いた時です。——僕は實際驚いたのです、僕の幸福は餘りに大きく見えましたが、殆んど有り得る範圍を越えてるやうに見えました。さあ其處です、若し僕が心の中に希望する事を自分で是認し、而も其が無効であつた曉には、

「什麼な事が僕に起つたでせう……併し勿論僕は僕だけの事を考へたのです、僕は不幸なる利己主義者ですから。」

話を中断して私を振返つた。

「ですが、彼の時僕が言つたことは全然謔言でもなかつたのです。何故かと言ふに、御承知でせう、其處には恐れると云ふ善い理由が僕に有つたのです。僕は貴女から非常に多く受けながら、非常に少く返すことしか出来ません。貴女は未だほんの小兒です、蓄です、未だ開かない蓄です。貴女は初めて愛します、然るに僕は……」

「え、貴郎が何う？ 本當の事を仰つしやつて頂戴」と私は言つた。言ひはしたものの、急に又如何な返事か知らとの恐怖に襲はれて、斯う言ひ足した。

「いゝえ、左様ぢやないわ。其の必要は有りません！」

「いや、僕が嘗て戀したか如何かと云ふのですか。」

直様私の考を推量つて、

『其事なら僕は貴女に言ふことが出来ず、僕は誓つて戀したことは有りません、今まで此の様な感を経験したことは有りません。』

とは言ふものゝ見るゝ或る痛ましい記憶が心の中に閃くやうに見えた。

『いや全く有りません。そして此の點こそ、僕が貴女を愛する権利を得ん爲めに貴女の心のやうな心を要する所です。』と哀しさうに言つて、

『だから、貴女に僕は貴女を愛しますと言ふ前に、先づ沈思熟考する必要は無いでせうか。僕が貴女に與へる筈のものは何でせう、唯だ愛、確に此れです。』

『其れが僅ですの？』村岡さんを凝視めて私が言ふと、

『僅、左様、貴女には僅でせう。』と續けて、

『貴女は若くて美しい、貴女には愛が全體です。けれど僕は人生に於ける多

くの經驗を有つてゐます。——僕は此頃實に幸福で、今にして初めて幸福に缺く可からざる凡ての物を見出したやうに思はれて、夜も屢ば睡眠れません。そして如何に是れから一緒に住むことになるかなどと老へ續けるのですが、最初に思ひ浮べるのは田舎の閑靜な處に於ける靜かな沈着いた生活、其處には人々の恩人たる可能性があつて、此の人等に善を施すことは容易く、又此等の人は是を経験したことが少ないのです。それから仕事、報酬を伴ふ仕事、次に休息、自然、書物、我々の近くにゐる人に對する愛、——此等が僕の幸福の理想で、此れ以上の物を認めることは出来ません。そして又就中貴女のやうな友、恐らく家族、及び此の世で誰も冀ひ得る有らゆる物が理想です。』

『眞個に左様で御座いますわね。』

『いや其れは僕の事です、僕が青年期を過してからの事です、確に然うです。貴女の事ではありません。』と言ひ續け、

「貴女はまだ人生を能く御存じない、貴女は尙ほ他の範圍に幸福を索めやうと希望して居られるでせう。」

「いゝえ、安靜な家庭の幸福は、平常私の目的であり希望でありました。今貴郎は私の不斷考へてる事を簡単に明瞭に言つて下さいました。」

村岡さんは微笑んだ。

「一寸貴女に左様見えるだけです、此等の事こそ貴女には僅の事です。貴女は若くて美しい。」と仔細らしく繰返すのであつた。

私は心を痛めた、村岡さんが私を信じて下さらぬから。村岡さんの仰つしやる事は、言はゞ私の若さと美しさを責めると云ふものだから。

「其んなに私が貴郎と一致せぬものですなら、何故私を愛しなさいますの？」腹立たしく尋ねて、

「私の美の爲めだと仰つしやるのですか、それとも私と云ふものゝ爲めです

か。」

「知りません、けれども愛します。」と其の鋭い魅るやうな一瞥で私を見ながら斯う答へた。

私は其れに返辭をしない、そして我にもあらず村岡さんの眼を見入つた。

と急に心の中に何か知ら妙な劇變が起つた。第一に、凡ての周圍の物を見ることを止め、次に村岡さんの顔が私の前から消え失せ、其の眼ばかりが私の目の前に輝いてるやうに思はれ、次に其の眼が私の心を占領して了つたやうで、それから物と云ふ物は悉く朦朧となり、有りとも有らゆるものは威く色が褪めて來た。で村岡さんの一瞥が私に與へた不思議な麻痺と恐怖との感を免れん爲めに眼を閉ぢねばならなかつた。

結婚式を擧げると云ふ日の前日、夕方晩く天氣が晴れ上つた。未だ夏の季節であつた頃から降り出した雨が止んで、初めて清々した涼しい秋の夕を見

たのであつた。何でも悉く濡れて涼しげに明るく見える。庭は疾うに凋落し初めた木の葉の秋の色、其れを割つて列樹が見える。空は清く澄んで涼しげに青い。明日の天気は定めし好からうと考へつゝ、心嬉しく部屋の窓を閉めた。翌朝は早く日の出と共に起床た。そして到頭今日だと思つた。私の心は恐怖と驚愕とで一ぱいであつた。私は庭へ出て見た。日は今しも昇つたばかりで、道に影を投じてゐる菩提樹の薄黄色の葉隠れに輝いてゐる。小徑はさらさら云ふ落葉が布き詰めてゐた。漿果の皺のある葉が附いてゐた。天竺牡丹は萎其の枝には未だ霜枯れした二三枚の皺のある葉が附いてゐた。天竺牡丹は萎縮びて黒くなつて立つてる。霜は初めて銀のやうに、青白い草の上や納屋の近くに踏躡られた午莠の上に結び、朗かな涼しさうな空には雲一つ無いのであつた。

『實際今日知ら。』我身の幸福を信じ兼ねて斯う思つた。

『其んな事が有る筈だらうか。明日からは此家ではなく、柱が列を成して彼の見慣れないニコルスキの家で起床るのだつて？ 彼の方の御來でを待つことは最早爲ない、會ひに行く事も爲ない、お雪さんと種々の話をする事も爲ない。——實際其んな事になつて了ふのだらうか？ 此のボクロボスキの客間で、彼の方と一緒にピアノに着席くことは最早無いのだらうか。もう戸の處まで見送つて種々と氣を揉むことは無いのだらうか、晩の暗い時に。』其の時私は思ひ出した。昨日夕方村岡さんが、斯うして告別するのも今回が最後だと私に言はれ、其の後でお雪さんが私を呼んで晴衣を着せて見て、『好く似合ひますこと。』と言つたつけ……。と斯う思ひ出して暫時は分明と事實を認めながら、又しても疑ふやうな沈思に耽るのであつた。

『今日から後、良人の母さんと彼の家で住むことになるつて本當か知ら？ 乳母の菊も居ない、五助爺やも居ない、お雪さんも居ない家で！ 其んな筈』

が有るだらうか？ 御休みと言つて私が菊に接吻し、それから奮くからの習慣に従つて菊が私に十字を結んで呉れ、お休みなさい松ちやんと言つて呉れることはもう無いのだらうか？ 園ちやんに日課を教へ、毎日互に遊び、朝園ちやんの爲めに寢室の戸を叩き、園ちやんが高い聲で笑ふのを聞くことはもう無いか知ら？ 今日私は別な人に變らねばならんのだらうか、今まで私自身が知らぬ人に？ 私の希望の實現たる新生涯が、果して私の前に展開してゐるのか知ら？ 其の新生涯は永久に續くであらうか？』

斯くて私は村岡さんの來られるのを待ち焦れてゐた。此の考を胸に抱いて一人で居るのは、實際私には辛かつた。

村岡さんは早く來られた。そして挨拶の言語を交はした時に、私は今日此の方の妻になるのだと晝然思つて、今までの取り留めない考も危殆も、風に拂はれた煙のやうに消えて了つた。

正養前に、兩人で私の父さんの追福供養の爲めに會堂へ行つた。

『父さんが今生きて在らしつたなら。』と、途すがら斯う思つて、私は沈黙つたまゝ、今考へてる父の最も親しい友達であつた人の腕に凭れた。會堂で祈禱の間、額を床の冷たい石に押當て、跪いてゐる内、私は父さんを極めて明瞭と心の中に喚起し、其の靈魂が私を認め、私の選擇を承認して下さつたと云ふ確固たる信念を受取つた。

そして歸りの途上に於ても、父の靈魂が私等の身邊をふはく、飛翔り、私等を祝福するやうに思はれて、回想や希望や幸福の感や悲哀やが、心の中で、勝ち誇るやうな一種の感情と混交つた。此の感情は、今日の靜かな清々した空氣に觸れて、又更に強く高まるのであつた。安靜、廣々した裸の野、赫く太陽、青白い空、此等が實に能く調和を保つてゐた。

私には斯う思はれた。私の側にある人は、私の感情を解し又私と同じ心持

であらうと。村岡さんは沈黙つて静かに歩む。時々私が覗く顔は私と同じ真面目な感情を表はしてゐる。是は悲哀でもなければさりとて喜悦でもない。自然及び私の胸と調和してゐる特殊の氣分であつた。

と、突然私の方を振り返つて、心に何か言はうと思つてゐなされる様子、『私の考へてる事を御話しなさらぬとしたら?』と、私は一寸摸索り心地で待つた。併し村岡さんは矢張り私の父さんの話をした。

『嘗て座輿に僕に言はれました、君は僕の松ちやんを貰つて呉れにやならんと、爾う言はれたのです。』此れが村岡さんの詞であつた。私は穩に、凭れて腕を押緊しめながら、

『父さんは今如何に嬉しく思つて在らつしやるでせう。』

『さあ、何卒喜んで戴きたいです。——當時は貴女は未だ眞の小兒でした。』と私を見ながら言ひ續けて、

『僕は其の小兒の眼を接吻するが常で、其れを愛したのは單に其れが父さんの眼に似てゐたからです。其の時分には、言ふまでもなく今に至つて其の眼が斯くも僕に貴重なものにならうとは、夢にも思ひ設けぬのでした。當時僕は何時も貴女を松ちやん松ちやんと呼びました。』

『今、松ちやんと言つて下さいな。』

『それこそ僕の望む所です。』と言つて、

『だが、今初めて松ちやんが僕の物であるやうに思はれる。』そして其の沈着いた嬉しさうな魅るやうな目指は私を見詰めてゐた。兩人は急がず野の小徑に沿うて徐かに歩んだ、蹂躪られた刈株の間に痕すらも残らぬ。一方には、溪谷を越えて、今は葉の無い遠い森の方まで、褐色の烟が廣がつて、其處には、程遠からぬ處に一人の百姓が、粗末な鋤で、音を立てずに黒い條をつけてゐた。其の條は漸次廣くなつて行く。丘の麓に散在つて馬の群は直ぐ手

近に居るやうに見えた。

他方には、直ぐ向方に冬麥の薄黒い畑が見える。此れは霜を結んで、此處彼處に青い斑を見せて、我家の庭の先方に突立つて見える家の方まで明瞭と廣がつてる。何も彼も皆太陽の秋の光を浴びてゐる。蜘蛛の巢の長い絲が方々に延び、或は霜に乾いた畑の上に懸つてゐた。話をすると聲が反響して、動かない空氣の中に漂ふやうに思はれる。其の感じは恰も、天地の中央に唯兩人、而も兩人共穩かな太陽が燦々と揺々と其の光を投げてゐる縁門の下に立つてるかのやうであつた。

「貴郎、何故其んなに早くお歩きなさるの。」斯う早口に、而も密語くかのやうに言つて、そして顔に血の逆流るのを覺えた。

村岡さんは步調を緩めて、愈々懐しさうに嬉しさうに、且つ活快らしく私を見るのであつた。

家へ戻り着いた時、村岡さんの母さんと、是非とも招待せねばならぬ御客さん方とは既に集まつてゐた。それから夜會堂を辭してニコルスキに行く馬車に乗るまでは、私はもう村岡さんと二人ぎりではなかつた。

會堂は殆ど空のやうであつた。私は纒かに、唱歌隊の隣の絨毯の上に端然と固苦しく立つて居られる村岡さんの母さんと、薄紫色の紐附きの帽子を被つて眼に涙を浮べてゐるお雪さんと、好奇心に驅られて私を見に来た二三人の下僕を見ることが出来たばかりであつた。

私は村岡さんを見なかつたが、私の近くに居られることは知つた。祈禱の言葉に耳を傾け、唇で其れを繰返したが心の中には何等の反響も無いやうに思はれた。自分で祈禱を捧げることは出来ない。私は茫然聖像や蠟燭や、坊さんの袈裟の背中に附いてる縫宿した十字架や、奥院の扉や又は會堂の窓などを眺めた。そして萬事は夢のやうであつた。

私は或る特別な事が私に起つてゐると感じたばかりであつた。坊さんが私共の方へ振向いて祝福し、それからもう私を洗禮してしまつたから神様は私を娶ることを村岡さんに御允しなされたのだと言はれた時、又お雪さんと母さん——もう村岡さんの母さんと言ふのではない。——とが私に接吻した時、私は驚愕した。と言ふのは何事も皆済んで、而も何等特別な事も心の中に起らなかつたからである。私の聖晚餐式に就いては何物をも感じなかつたからである。

良人は私とは互に接吻を取交した、此の接吻は私の感情に非常に異様に、又今迄とは違つた事のやうに思はれた。

「もう済んだのか知ら？」と我と我身に尋ねたのである。

兩人は會堂の玄關へ行つた。五助爺やが近づける馬車はガラ／＼と圓屋根の下で反響した。と私の顔は涼しい微風に吹かれた。良人は帽子を被つて私

の手を取り、一緒に馬車の中へ入つた。馬車の窓から氷つてるやうな弦月が見えた。

良人は私の側に席を取つて扉を閉めた。何か知ら私の胸に動悸打つ。斯う扉を閉めて安心したやうな様が、私を侮辱してゐるかの氣味に見えた。

お雪さんの聲で、私の髪を覆ふやうにとか何とか叫んでゐるやうに聞えた。車輪が石に衝突つた。それから平滑な道を取つて進んだ。身體を締め氣味にして、私は窓から遠くの野や道を眺めると、月の冷たさうな光に依つて、青白く浮き上つてゐるやうに見えた。そして私は良人の方を見なかつたものゝ、何か言ひかけたさうにして側に居られることを知つたのである。

「あれ程焦心く待ちに待つた時が來ても、私に與へられるものは此れだけか知ら？」斯う思つて斯んなに近く此の人の側に坐つてゐるのが、何だか詰らないやうな抑壓けられてゐるやうな感じがして來た。何か言はうと思つて振返つ

たが一言も口に出ない。恰も以前の愛情が塵程も私の心に無くなつて、屈抑と沮喪とが之に代つたかのやうであつた。

併し此の時良人の方から沈黙を破つた。

「僕に斯かる事が有らうとは、今迄夢にも信ずることが出来なかつたのです。」と私の顔を見て、物優しく低語いた。

「左様？　ですが、何故か知りませんが私には恐いやうですわ。」

「僕が貴女に恐く見えるつて？」斯う言つて私の手を取り、そして其の唇の所へ持つて行つた。

私の手は正體もなく良人の手の中にあつた。そして私の心の中には痛ましい冷淡の感じが潜んでゐた。私は低語いた。

「え、左様ですの。」

併し此の時急に私の胸は愈々激しく鼓動して来て、私の手は顫ひ、突然確

乎と良人の手を握つた。温い感情が心に流れて来て、私の眼は薄明りに良人の眼を見入らうとした。すると又急に此の人が恐くなつて、握つた手から自分の手を引き取らうとしたが、此の恐怖こそ實に愛で、新しく、以前よりも一層優しく強くなるのであつた。私はもう全く良人のものだ。此の人が私の主権を握つて下さつてこそ幸福なのだ。斯う私は感じた。

六

日は去り週は来り、淋しい田舎生活の二箇月は、實際有耶無耶の間に夢と過ぎた。唯同時に此の二月間の感情、知覚、乃至歡喜は、總て消えざる記憶として互の心に印象せらるゝに充分であつた。

併し田舎に於ける我等の生活は如何に組織せらるべきかに就いての私の夢も良人の夢も、全く豫期通りには實現されなかつた。と言つても勿論我等の

生活は全然失望する程ではなかつたが、私が婚約の整つた時想像したのは、精出す労働でもなければ義務の充實でもない。克己でもなければ、さりとして他人の爲めの生活でもなかつた。是とは事變り、相互に自分で満足する思ひの儘な愛情であつた。唯愛せられる願望であつた。永久の歡樂であつた。世界の凡てを忘れることであつた。

確かに良人は、時には書齋に入つて事務を執る爲めに閉籠ることもあつた。時には町へ行き、そして再び所有地の用事で出掛けることなどもあつた。兎角不在勝ちであつたが、私は、良人に取つて私から離れるのはどんなに辛い事だらうと思ひ遣つた。私が良人の不在を佗しく思ふと同様に、良人も亦私が居なかつたら世の中は全く詰らないので、殆ど其の中に何等の興味も見出すことが出来ないだらうと考へる位であつた。

私は書籍を読み、音楽を奏で、母さんの手傳をしたりして暮したが、是と

云ふのも、唯此の中何れでも皆良人に關係を有つて居る仕事で、此れが爲めに良人の稱賛を博することが有るからであつた。併し、何かの機で自分の良人に就いての考が何か特殊の仕事に一致しないやうな場合になると、私の手は何時も脇に垂れ、世の中に良人以外に誰か居ると考へるのが餘程變に思はれたのである。大方此れは根據なき手前勝手な思想であらう、が是に依つて私は愉快を感じ、自分を全世界の上に超越せしめるのであつた。

私の眼には良人は地球上無比の人物で、世に最も優秀れた最も完全な人だと思つた。随つて私は良人以外の何人の爲めにも生きることが出来ないのだと感じ、良人の眼に、良人が私に望んだものたるべく努めずには居られなかつた。

或る日、私が丁度祈禱を捧げてゐた時、良人が私の部屋へ入つて來られた。私は振返つてちらと見て祈禱を續けた。良人は、私の邪魔にならぬやうに、

卓子に倚り書籍を開いた。けれど私には良人が私を見てゐるやうに思はれ、周囲を見廻した。良人は微笑を洩した。私は笑ひ出して、もう祈禱を續けることが出来なかつた。

『貴郎もお祈禱は終んで？』

『あゝ。がお行りなさい、僕は失敬する。』

『あら、去らしつちや不好。貴郎もお祈禱を述べて下さいな、後生ですから、ね、宜いでせう。』

良人は返事をしないで行かうとしてゐた。私は引留めて、

『ね貴郎、何卒、妾の爲めに、一緒にお祈禱を讀んで頂戴。』

良人は私の側に、不恰好に手を落して立ち、真面目な顔付で、而も吃りながら讀み出された。時々私の方に振向く様は、恰も私の顔に稱賛と應援を求めめるかの様であつた。

讀み終つた時、私は笑つて良人を抱擁した。

『は、あ、又例の、僕は十歳の小兒になつたやうだね。』顔を赤らめ私の手を接吻しつゝ、斯う言つた。

我等の家は、人々互に相愛し相敬ひ、大人も居れば子供も居る由緒ある郷家の一つであつた。善良にして純潔な家庭の氣風は馥郁として家の中に充ち、私が此家に住むやうになつた時、此の氣風が直に私の精神に流れ入つて私の人格の一部分となるやうに思はれた。

家の整頓や裝飾やは、母さんが好む古風のものであつて、優美で立派だとは言はれないが、下婢下僕から、日用品食品等に至るまで、何から何まで澤山に有つた。而も其の何から何までが悉く端然として確乎として、規則正しく畏敬の念を起さしめるのであつた。應接間には器具が體裁よく配置され、壁には肖像畫が掛けてある、手製の絨毯と縞の亞麻布が、床の上に布かれて

ある。客間には、古い大ピアノ、遠つた形體をした二箇の箏篋、長椅子、及び眞珠貝を鑲めた卓子などがある。私の部屋は母さんの心付けから、各種の時代各種の時様の一番美しい日用品が備へ附けられてある。其の中に古い姿見が一つある。最初は是を覗くさへ羞しかつたのであるが、遂には昔馴染の友達のやうに貴いものになつた。

母さんが家庭で小言を言はれることなどは滅多に無かつたが、萬事は時計仕掛のやうに整然と行つてゐた。大勢な有り餘る程の婢僕がゐて、而も常に物靜かに萬事が整頓してゐた。婢僕は皆、踵の無い柔かな靴を穿いてゐる。——母さんは靴がきい／＼云ふのと踵の音は世界で最も不快なもの考へて居られる。——此等の者は皆自分の境遇を誇としてゐるやうに見え、母さんの前では鞠躬み、良人と私をば事無きやうにと守護き敬ひ、各自の仕事を此の上なく満足して爲るのが明かに眼に見えた。

毎土曜には屹度床を洗ひ、絨毯を叩く。月の一日には神事を行ひ淨き水を洒ぐ。祝誕祭の折には何時も、母さんの時も、良人の時も、私（私のは此の秋初めて）の時も、近所の人々を残らず招くのであつた。凡て此の種の事柄は、遠く母さんの記憶に存つてゐる時分から、一度として慣習を破ること無く行はれたのである。

良人は家事經濟向の事には干渉しないで、唯畑の事や百姓の事を監督して居られた。そして此れだけでも容易な事ではなかつた。で、冬も非常に早く起き、時々私の目覚める頃にはもう出掛けて居られるのであつた。多くは茶時に歸つて兩人一緒に飲むので、殆ど定つてゐるやうに此の時、仕事の心配やら疲労やらの後へ、「野暮な熱中」と名をつけた彼の極めて嬉しさうな心の状態が顔に現れるのであつた。

屢ば私は朝何をなされたかと言つて尋いた。そして良人が餘り荒唐無稽し

い話をされるので思はず失笑すのであつた。時には眞摯な話をして下さるやうにと言ふと、今度は又故意と、非常に鹿爪らしくなつて話した。私は良人の眼や唇の動くのを見入つた、そして何物をも記憶しない。が唯々良人の顔を眺め聲を聞くのが何よりも嬉しかつたのである。

『さあ、何を僕が話してゐましたか？ 聴きませう。』斯う言はれると、一語も話すことが出来ない。眞摯な話をと望んだからとて、良人が我々相互の事より他の事柄を言つて聞かせると云ふのが抑もの誤謬ではあるまいか。初め私は、良人が爲て居られた事が何であつたかを聞くのは殆ど興味の無い事であつたが、間もなく漸次良人の仕事を了解し、幾分か趣味を感じるやうになつて来た。

母さんは正餐時までには私等に姿を見せない。朝は御自分獨で茶を喫み、下婢を遣して良人が昨夜能く睡眠んだか如何かを尋ねさせるばかりであつた。

我等の特殊な身に餘る程幸福な小世界に於て、母さんの厳格な何から何まで整然とした部屋から洩れ来る聲を聞くのは極めて異様に思はれ、且又私等の聲とは非常に違つてるので、下婢に答へる時には心から浮き上つて来る笑を抑へることが出来なかつた。

下婢は丁寧 hands に手を突いて斯う言ふのである。

『旦那様が昨日馬に騎つて行らした後の御機嫌は如何で御座いますと、阿母様からの御尋ねで御座います。そして御自分の事に就きましては、昨夜終夜神経痛を御病みなされ、村の悪い犬めが吠えたので些とも御睡眠にならなかつた事を旦那様にお知らせ申せとの仰せで御座います。それから又、今日の麵麩は御氣に召したか如何か承りたいさうで、それに、今日は太郎治が麵麩を製へないで文三が實驗に初めて製へることになりました、全く拙いと云ふ程でもなく、取り分け卷麵麩は良かつた方でしたが、バイは餘り製へ過

ぎましたことを旦那様に申上げなさいと仰つしやいました。』
 正餐になるまでは、兩人一所にゐることは非常に稀で、私は何を爲るとも
 なく遊ぶか、獨りで書籍を読み耽り、良人は手紙を書くか或は出掛けるかす
 る。併し正餐の時刻が来ると兩人は客間へ行く、母さんも部屋から出て来ら
 れ、屹度毎日、良人は年來の慣習に基いて、母さんの手を取つて食事に連れ
 て行かれる。が母さんは又、良人が他の手で私を連れて行くやうに言ひ、そ
 して毎日屹度、戸の處で混雑するのであつた。此の戸は狭過ぎて皆が一緒に
 入ることは出来なかつた。母さんは食卓の上席に着いて、會話は眞摯に又少
 からず嚴格な調子で進行する。良人と私が取交はす二三の單純な言葉が、此
 の食卓會話の嚴肅に對して輕快な對照をなすのであつた。時とする親子の
 間に議論が惹起つて、互に嘲弄的の言葉を交へる。私は別して此等の議論や
 嘲弄が面白かつた。何故と云ふに、親子兩人を聯結ける確固たる優しい愛情

が、此れに依つて愈々明かになつたからである。
 食事が済むと母さんは應接室へ行き、大きな臂掛椅子に腰を下して、煙草
 を喫むか、新に買った書物の縁を截開くかする。其の間に良人と私は、聲高
 に朗讀したり、或は客間へ行つてピアノを弾いたりするのであつた。
 此の時刻に又、様々の來訪客、何かの寄附を求め人々、名門ではあるが
 貧窮な奥様方や、屢ば我家へ來られる様々な方々やが御來でになる。母さん
 がお會ひになる人もあれば、良人が會ふ人もある。直に三人の居る處へ通さ
 れるのは特別親しい方である。
 兩人は此の數週間に随分書籍も讀んだが、其れでも音樂は矢張り大好きな
 此の上ない娛樂で、奏でる度毎に我等の心の新しい琴線に觸れて、言はゞ互
 の心が交替ふのであつた。私が良人の好きな物を彈するときは、良人は室の
 彼方にある長椅子に腰掛ける。其處は私が殆ど見ることの出来ない場所であ

る。斯うして良人は、音楽に依つて動かされた印象を匿さうとするのであつたが、折々私は良人の思ひ設けない時に、ピアノから立ち上つて駆けて行き、其の顔から感動の痕跡、眼から其れに伴ふ輝と濕潤とを見出さうとした。すると良人は何時も周章て、其れを見られまいとするのであつたが不能であつた。母さんは時々私達と會話したがつて其處へ入つて來られたが、邪魔をしてはと配慮ひ、時には一向見ぬ風をして、真面目に何氣ない顔を装ひ、部屋を通り過ぎられるのであつた。けれども確かに母さんが御自分の部屋に閉籠らねばならぬ理由としては無かつたので、間もなく復び入つて來られるのであつた。

夕方私は大きな應接室で茶を出して、もう一度家の者は残らず卓子に集つた。磨いて燦爛する湯沸の前に固苦しく端然と坐つてゐたり、洋盃や茶碗やを分配つたりして、初めの程は妙な身顛ひが止まなかつた。私は未だ餘り年

若で輕卒で、斯んな役には適してゐないやうに思はれ、大きな湯沸の口を傾げたり、盆の上に洋盃を載せたりして、『是は靜雄さんの。』『是は政子さんの。』と言ひ、『政子さん未だ甘味が足らんのか？』などと尋ね、それから乳母や僕の爲めにも砂糖を入れて遣る事は、私には能う出来なかつた。

『は、あ、中々巧い、巧い。』時々良人は斯う言ふのが癖で、

『丁度大人の奥様如たいた。』此の言葉を聞くと、益々惑亂して了ふ。

茶が濟むと母さんは、骨牌を遊ぶか、政子さんが占をするのを聞くかする。其れが終ると私達を接吻し、十字を結び、そして私達は部屋へ退くのである。併し大概、夜半まで起きてゐて、是が又一日中で最も楽しい時であつた。良人は過去の事を話して聞かせ、兩人で種々今後の計畫などを語り合つた。時とすると、ずつと飛び隔れた哲學の議論を闘はせ、而も上階に聞えない程の低い聲で話すやうに注意したから、母さんは其んな事は露程も知らなかつた。

疾に就眠つたものと思つて居られたのである。又或る時は空腹になつて、密と勝手の棚の方へ行くと、下女の直が氣を利用して冷めた食物を持つて來て呉れ、其れを二人で蠟燭の明で食べたことも有つた。

我等は此の廣大な舊い邸に、幾分か、暫時宿借る旅人のやうな氣分で住んで居た。家の中には到る處母さんの嚴格な舊思想が漂つてゐた。母さんばかりか、奴僕、年寄の下女、家具、繪畫などまで、一種の尊敬一種の畏懼の念を私に與へ、縦令我等は斯かる境遇には全く不向であつても、然も此處で緻密な注意深い生活をするのが我等の本務であると思ふのであつた。

今になつて回顧つて見ると、多くの事が眞に固苦しく不快で、——彼の嚴格な單調な秩序や、家の中の大勢の、怠惰てゐながら好んで人の過失を捜す者のことなどは、考へるも辛氣い事であるが、其の當時は此の束縛こそ、却つて我等の愛を高めるのであつた。

良人も私も、如何な事でも不愉快に思ふ素振は露程も見せないで、良人は何か不快な事には屹度眼を閉ぢた。母さんの小使の豊吉と云ふのがゐて、これは大層煙草好きであるが、私達が毎日食事後客間に居る間に、良人の書齋に入つて、何時も卓子の抽斗から煙草を盗み出す。そして良人の様子が眞個に可笑しい、爪先立ちで私の所へ來て、密と指しながら、見付けられてゐるとは露知らず盗んで居る豊吉の方へ胸を叩く。そして、其れとは氣が付かず、今日も思ひ通りにやつたと喜ばしさに豊吉が出て行く時に、良人は私に可愛いと云つて接吻するのであつた。

時には此の穩かな性質、寛仁なる態度、否言は、餘りと云へば明瞭した無頓着さ加減が私の氣に適はなかつた。とは言へ私も此の缺點が無いとは言へない、是を私は弱點だと言つてゐる。

「全で意志の發表の出來ない小兒のやうだわ。」

斯う私は思つた。或る時私が貴郎の弱點には驚きましたと言ふと、

『だがね、僕が非常に幸福な時人の感情を害することが出来るでせうか。他人に何か強ひるより成行に任せる方が僕には容易い。此の事はずつと以前から僕は氣付いてゐました、併しそれで實際幸福になり得ないことは無いのです。僕等は眞に幸福です。僕はもう腹立つと云ふことは出来ません、僕には「悪」と云ふやうなものも無い、唯有るのは同情、寧ろ慰藉です。ですが昨今の私の所感の要點は他にあります、——より善い事は善い事の敵です。僕を信じて下さい、僕は扉の鈴を聞き、手紙を読み、或は單に朝眼が覺める時でも、一種の恐怖を感じます。何も變つた事が起らずに生活せねばならんからです。今日より善い事は事實有り得ないことですから。』

私は良人を信じた、けれども良人を解しなかつた。私には嬉しいが唯其れだけで、嬉しいかるべき筈に嬉しい別な嬉しいさであり得ない。私は凡ての人と共に嬉しく楽しい、併し他所には他の幸福の形式があつて、恐らく私のより大ではなからうが、多少是と異つてゐるであらうとやうに思はれた。

斯くして二月は過ぎた。冬は来て天氣は寒く吹雪が荒ぶ。良人は私と一所に居られても心に無聊を感じ、人生は單調無趣味で、我等に何等の珍しいものを持來さないことを感じて來た。そして我等が往時の轍に向つて歸りつゝあるやうに思はれた。良人は以前に増して事務に忙しく私を等閑にするやうになつて來て、往時の觀念が再び私に歸つて來た。良人の精神には私の入るを許さぬ特殊の世界があると云ふ觀念が歸つて來たのである。

良人が其れで満足して居るのが私を刺戟した。私は以前に劣らず良人を愛し又良人が愛して呉れるので、相變らず幸福であつたが、併し私の愛は靜止の状態となつて發展するのを止め、今は愛以外に沈着かない新しい感情が私の精神を占領するに至つた。

私が自分で良人を愛してゐると初めて知つた以後、我等の愛情が同様の事を繰返して不斷に續くのは全く無意味の事で、私の切に望む所は活動であつて固定した生活の安静ではない。此れは私の思想と云ふよりは私の感情である。私の心の底には豊富の力がある。此の力も静かな家庭生活には施すべき餘地が無かつた。私は憂鬱の氣壓に襲はれた。そして是をば何か悪い事でもあるかのやうに氣付かれまいと努めたのである。それから時々無闇に優しくなつたり快活になつたりして、良人を驚愕させた。

氣付かれまいと努めたが、良人は私の心を讀んで了つて町に行かうと言ひ出した。が私は、行かぬやうに——我等の生活の道を變へないやう我等の幸福を毀損しないやうにと願ふのであつた。實にも私は幸福であつた。とは言へ私の苦しかつたのは、此の幸福は私に何等の努力何等の犠牲を要求しない。私は此の時、努力の念と犠牲の精神とが心の中に燃えてゐた。私は良人を愛

する。又良人に取つて私は全世界であることを知つてゐる。が併し私は我等の愛の悉くを見たい、私の愛情の道に障礙物となる何物か起つて來れば可い、爾うすれば私は益々良人を愛するだらうに。

私の精神感情は斯くして働いてゐるが、然も此等以外の他の感情がある。若さの感情である、活動努力の要求である。此等のものを發見すべき場所は、私の安静な生活の中には無かつた。

だか何故良人は町へ行つても宜いと言つたのだらう、其れが私の唯一の希望であつたときに。良人が左様言つて下さらなかつたら、私を苦しめる感情などは、不健全な妄想で又私の過失であつて、私の冀ひ求める當の活動も努力も、直ぐ私の前——過つた感情の消失せる處に在るのが了解つたらうに。

單に町へ行くことで、私の心に生ずる憂鬱を免れる力が私に有ると云ふ考

が我知らず心に浮んで来て、同時に、唯私の都合から良人の好きなものを奪ひ取つて了ふのは、卑しい事であり戒むべき事であるやうに思はれた。けれども時は流れて行く。雪は漸次高く家の石垣の上に積つて来て、何時も何時も二人は二人限りだ。そして我等は互の眼には何時も同じであつた。然るに見よ、彼方の何處かには、光輝の中に、人生の渦巻の中に、大勢の男女の群が或は苦しみ或は喜び、我等を他所に、我等の微々たる存在に気が付かずに生活してゐるではないか。

何より悪いことには私は斯う云ふ事を認めた。日又日、我等の生活の習慣は、我等の生活を一の固定した形式に鍛ひ行き、我等の感覚は日に日に鈍くなり、單調な苦痛なき「時」の進行と一致しつゝ、あるのである。我等は朝愉快で元氣がよい、晝は鄭重に、夕方は睡じかつた。

『善事を爲し……』斯う私は心の中で呟つた。

『善事を爲し、神の前に光榮ある生活をするのが結構な事であるのは良人の言はれる通りである。私達には尙ほ其れを爲す時が有る。併し、今、唯今の時のみ私が其れに必要な力を有する或る物が在る。』

此の精神状態が私の健康に悪影響を與へ、神経に悩むやうになつて来た。或る朝平常よりも悪るかつた。良人は氣遣つて事務所から早く歸つて来た、是は良人には珍しい事で、他にも何か事故が有つたらしい。直様其れと氣が付いて、何事ですと尋いたが、私に話しさうにもしないで、其んな事は聞いても役にも立たんことで、其の必要は無いと云ふのであつた。後になつて知つたのであるが、警察署長が我家の小作百姓達の家に行き、良人に對する不親切な意思から彼等に不條理な仕向けをして嚇かしたと云ふことである。良人は例に依つて、或る程度まで是を冷淡に見ることが出来なかつた。斯んな事は眞の一寸した事件に過ぎないのであるが、良人は腹を立てゝゐて、私に

も素直に話して下さらなかつたのである。けれど尙ほ其の上に、私は未だ小兒同様で、良人に關する紛糾つた事を解することは不能ぬと考へて居られたからでもある。

私は顔を背けて何も言はない、そして今日あたり我家へ訪れる筈になつてゐる政子さんを茶に招待するやうに使を遣つた。茶を平常とは異つて匆々に飲んで了つた後で政子さんを客間へ案内して、高い調子で、自分には一向面白くもない四方八方の話を始めた。良人は其處へ入つて來られ、折々私達の方を眺める。斯う見られると一種特殊の影響が私の心に起つて、私は一層夢中に話し出し、はしやぎ過ぎる様にさへなつて來た。そして自分の言つた事乃至政子さんの言つた事は、悉く他愛もない笑ふべき事のやうに思はれた。良人は何とも仰つしやらんで、書齋に去つて扉を閉めた。最早良人が聞かないのかと思ふや否や、私の快活は急に何處へやら失せて了つたので、政子さ

んは驚愕して何うかなすつてと尋ねるのであつた。

其れに答へやうとはせず、私は長椅子の上に身を屈して、唯一途に泣いて見たいと切に感じた。

政子さんが辭し去つた後で、『良人は何と考へて居られるか知ら？ 私に話してさへ下さるなら、私だとして自分の地位相應の意見を有つてゐないことは無いのを合點させて上げるわ。良人は屹度私が理解しないだらうと考へて在らつしやるわ。もう一度尋いてみるとしたら、尙更沈着き拂つて、依然私を壓伏けやうと爲なされるに違ひないわ。良人は始終私より一段上に立たうと考へて居られるのよ。でも私も良人が正しい通りに正しいわ。此處では斯様に退屈で氣拔けがしてゐる様だけれど、私だとして孜孜と働きたい望は充分に有つてゐる。』斯う私は自分に言つて、

『一つ場所に停止つてゐなかつたら、什麼に時が過ぎ行くだらう。私は進み

たい、毎日毎時何か珍しいものが欲しい、何か異つた事に接したい。けれど良人は立木のやうに固定としてゐて、私をも阻へ止めやうとしなさるんだわ。是は良人に取つては什麼に容易い事であらう、其れ故良人には町へ私を連れて行く必要は無いのだわ。』

胸は熱涙で一ぱいになつた、そして良人が恨めしかつた。自分の臆志に驚愕して聽て私は良人の所へ行つた。良人は卓子に對つて何か書いて居られる。私の意見を聞くと、靜かに何氣ない風に一瞥と振り返つて、そして又書き續けるのであつた。此の様子が如何にも不愉快に思はれて、良人の傍へは行かないで、卓子の他の側に行つて、書籍を開いて頁を繰り初めた。すると良人は、復びペンを休めて私の方を見て、

『松さん！ 氣分が悪い様だね。』

私は冷かな目付で返事をした。眼は斯う言ふ、『何故尋ねなさるの？ 唯面

白半分に……ですか。』良人は優しく親しげな微笑を浮べて頭を振つた、が私は此の時初めて、斯うした場合の應答の微笑を洩らさなかつた。

暫時して私は言つた。

『今日貴郎何が御心配でしたの？ 何故私に言つて聞かせて下さいませんの？』

『何眞の些細らぬ事さ、少し許り不快に思つただけさ。』斯う答へて、

『だが今貴女に言ひませう、二人の百姓が町へ召喚されたのです。』

併し私は其れだけで話を結ぶ機會を與へないで、

『先刻私がお尋きした時、何故聞かせて下さいませんでしたの。』

『彼の時は、何か氣に障ることを貴女に言つたかも知れん、僕怒つてゐたんだから。』

『彼の時私事由が知りたかつたんですもの。』

「何故ですか。」

「貴郎のお考へなさるのでは、私は何も貴郎の助けになることは出来ないでせうか。」

「其れは何の事ですか。」とペンを投棄して、

「僕は考へます、僕は貴女がゐないでは生きてることは出来ません。貴女は萬事に就け僕を助けるばかりでなく、貴女は僕の全世界です。——什麼して貴女は其んな觀念を抱き始めたのか知らん。」と笑ひながら、

「僕は唯貴女の爲めに生きてゐます、何でも彼でも貴女の爲めに僕には善く見えます。僕は楽しい、唯貴女が此處に居ると云ふだけで、貴女が……」

「左様ですわ、私は可愛い小兒ですわ、唯斯うして伏居ばせて置くに限りますのよ。」と良人が驚愕するやうな調子で言つたので、什麼な氣がしてゐるのかと初めて注意して私をつくづく眺めた。私は語を續いで、

「私には閑靜なんか要りません、貴郎御一人で兩人分の閑靜を充分御享有なすつては如何で御座います。」

「では貴女は、何が人の憂苦かお了解りですか。」と急ぎ込んで私を遮り、私の胸に秘めてある事を皆言はせまいと氣遣ふ様が明瞭と顔に現れて、

「此の問題を如何断定しますか？」

「私今は其んな事をお話したく御座いませぬの。斯う私は答へた。爾う云ふ問題を良人と論じて、自分の所見を精々言つてみたいのは山々だが、此の時は唯、良人に自分の不平を知らせるといふ事に劇しい喜悦を感じて、

「私生活を弄ばうとは思ひませぬの。私は生活らしく生活したいのです、貴郎が生活なさるやうに。」

有りとあらゆる感情に、直様應へるを常とする良人の顔面には、苦痛と熱心な注意との表情が電の如く閃いた。

「貴郎と同じ様に生活したいわ、貴郎と等しく……」

皆言ふことが能なかつた。苦痛、深い苦痛の色が良人の顔に現れて来たから。良人は暫時の間沈黙つてゐたが、

「左様です。ですが貴女は僕と等しく生活してゐます。然うでせう。唯僕が、僕が警察署長や百姓に關係つて……」

「いゝえ、其の事ばかりではありません。」

「何卒、僕を解して下さい、僕のを。」と言ひ續けながら、

「僕は知つてゐます。心配が有るといふ事は、貴女に取つても僕に取つても何時も苦痛です。僕は今迄人生を経験して来ました、そして此の事を知つてゐます。僕は貴女を愛し、且つ真心から貴女を心配に近寄せまいと願はずにはゐられません。僕の生活は此の——貴女に對する愛の中に在ります、だから僕の生活を攪亂しては不可ません。」

「何時も貴郎の仰つしやる通りですわ。』眼を向けることもしないで斯う私はい言つた。

私の心苦しく思つたのは、良人の精神が再び明瞭と静かになつて来て、此の時私の精神は元通りの煩悶苦惱と後悔とも云ふべき一種の感情に充たされることであつた。

「松さん！ 甚麼したのです？」と斯う叫んで、

「問題は僕が正しいか貴女が正しいかと云ふことではありません、全く別な事です。僕に對して何か不平の事が有りますか。輕卒な事を言つてはなりません、續密と考へてそれから思つてゐる事を何なりと言つて下さい。貴女は僕を怒つてゐる、勿論貴女には相當の理由が有るに違ひない、併し何の點で僕が非難を受けるのか聞かせて貰ひませう。」

とは云へ如何して心に思ふ事を其の通りに言はれやう。良人が斯く直様私

の心を知り抜くことも、私が復も良人の前には小兒の様に思はれることも、良人が其れに就いて何から何まで知つてゐるのみか先の事をも豫知する人であることなど、此等の事は私を益々憤らせるのであつた。

『貴郎に對して不平などは少しも有りませんわ。唯何も彼も私には退屈に思はれます、そして斯んなにしてゐることは私願ひませんの。其れを貴郎は左様なければならんと仰つしやるでせう。茲でも亦貴郎の仰せは正しいわ。』
斯う言つて依然良人の方を見なかつた、思ふ壺に當つた。良人が立腹して何か言はうとする氣勢が感知つて、密と偷み見ると、もう良人の静穩は消え失せてゐた。顔には苦痛と憂懼の色が現れて來た。

『松さん！』と低い激した聲で、

『戲謔ではありません、貴女が今僕に對して行つてゐる事は。今や僕等の運命は決定せられつゝあります。貴女は何故僕を苦めやうと思ふのですか。』

私は其れを遮つて、

『私知つて居ります、貴郎の仰つしやる通りですわ。私何も喋らん方が宜いのですわ、貴郎の仰つしやる通りですもの。』と冷かに言つた。恰も自分ではなくて悪魔が私の心の中で喋るかのやう。

『貴女が貴女の今行つてゐる事を解してさへ居つたら！……』斯う言ふ聲は顫動を帯びてゐた。

私は涙に咽んだ、そして胸が軽くなつた。良人は私の側に來て立つたまゝ、一語も言はない。私は氣の毒に思ひ我身を恥ぢ、私のした事を悔いた。私は良人を見ないが、此の瞬間に、厳しさうにか但しは當惑した風にか何らかで、私を見て居られるに違ひないやうに思はれた。私は勇氣を出して見上げた。優しい親しげな眼は私を見詰めてゐる、其の様が丁度私の寛恕を乞ふかのやう。私は良人の手を確乎と握り、

「免して頂戴！ 私自分で自分の言つてる事が分らなかつたわ。」

「免して上げます。ですが貴女の言つた事を僕は能く解つてゐる、それから貴女の言つた事は事實です。」

「何う仰つしやるの？」と私は尋いた。

「僕等は彼得堡へ行かねばなりません、此處では爲る事はありません。」

私は二三分経つてから言つた。「貴郎の御考へ通りに……」

良人は私の手を取つて接吻した。

「思ひ遣りが足らなかつたのです。」と小聲で言つて、

「僕は貴女に對して濟まなかつた。」

此の夕、永い間、私は良人の爲めにピアノを弾じた。そして良人は室内を彼方此方歩きながら何か呟いてゐた。良人には呟く習慣がある。私は折々何を言つて居られたかを尋ねると、良人は何時も少し考へてから口にしてゐた

ことを殆ど残らず言つて聞かせた。大概は詩であつたが、時としては何か奇異な道化歌などを歌つて居られたのである。が却つて此れで良人が什麼感して居られるかを知ることが出来た。

「何を繰返しておいででしたの？」斯う私が尋くと立留つて、少し考へた後莞爾と笑ひ、レルモントフの詩の二行を繰返すのであつた。

「我を忘れて暴風戀ふ、

暴風に平和見しが如。」

「非凡いのね、此の人は何でも知つてゐられるのよ。」と私は心の中で言つた。

「甚麼して此の人を愛さんで居られやう！」

私は飛び立つて、良人の腕を把り、そして良人と同一の歩調を取らうと努めつゝ一緒に歩き出した。

「如何しました？」微笑を湛へて私を顧みながら良人は斯う言つた。

「え」低聲で私は單だ斯う應へた。名状すべからざる愉快の感が私の心を占領した。良人も恐らく爾うであつたらうと思ふ。二人の歩行は一步一步と速くなり、私は漸々高く爪先立ちとなつて、腕を組んだまゝ、書齋から歩き出で、部屋々々を通り抜けて、食堂まで行つた。そして此處で立留つて、相互に顔見交して心から笑ひ出すのであつた。

其れから二週間の終に、——丁度クリスマスの前日、我等は彼得堡に居つた。

七

彼得堡への我等の旅行、莫斯科に於ける一週間の滞在、良人並に私の親戚への訪問、我等が新なる住居の整理、美事な道路、見慣れぬ町々、見慣れぬ顔、——實にや此等は夢と過ぎた。世は雜駁で目新しく陽氣に見える。良人の

の現在と良人の愛に依つて萬事が溫暖に燦々と眩く照されて、閑靜な田舎生活は遠く遠く影を没し、而も無意味に考へられるのであつた。

何と云ふ驚愕する事であらう。社會に出たならば屹度目撃するだらうと期待けた浮世の傲慢と冷淡とは露程も無く、凡ての人は——單に私の親戚とのみ云はず、見知らぬ人までが——皆私に眞心からの好意と誠實とを以て接して下さるのが、恰も誰も皆私の事を考へ、私の幸福を完うして下さる爲めに私を待つてゐたかの如くに思はれた。最も意外に堪へないのは、良人は殊に最高と思はれる交際社會に澤山の知己が有ることであつた。良人は此等の人々に就いては、嘗て一度も私に話したことは無い、私は幾度か此の事を變に思つた。そして又其の中の或る人に、良人が峻酷い斷定を下すのを聞くのは私には不愉快に思はれた。此の人達は私には立派な方と見えた。何故良人は彼の人達の應對に粗略なのか知らん、何故私の好きな多くの知己を避けやう

として居られるのか知らんと、私は實に了解するに苦んだ。立派な人と親密になればなる程好いと私には思はれる。そして此の人達は皆立派な人であつた。

『ね、僕等の位置が什麼であるか貴女は知つてるでせう。』田舎を發する前に良人は斯う言つた。

『此處では微力ながらも霸王です、ですが彼處では逆も有福などとは言はれません。ですから唯復活祭まで町に逗留して、無論交際社會へなどは出られません。でないと面倒な事になります。左様です、貴女の爲めに僕は……』
『何故交際社會と仰つしやるの？ 劇場へ行き、親類を訪れ、オペラや音楽などを聴かうではありませんか。そしたら復活祭前でも田舎に歸りませう。』

けれども彼得堡へ着くや否や此の豫定は忘却られた。私は急に新しい歡

樂の世界に出た、私の心は多くの喜悦を充滿され、珍しい新しい興味湧いて来て、私は全然無意識に、私の全き過去、私の過分に有つてゐた幸福を悉く打消すのであつた。

『彼は皆無意味なものであつたわ、彼の時は未だ生活を初めなかつたんだもの。是こそ眞の生活だわ。さうよ。でも如何程もつと澤山私達の爲めに待設けてゐるだらう。』斯う私は自分に言つた。

田舎で私を不安にした間斷なき憂鬱の感情も退屈も、魔術のやうに影を隠した。良人に對する愛情は靜穩になつて来て、而も良人の愛が衰へ行かうとは露聊も思へない。實際左様であつた。秋は良人の愛を疑ふことは出来ぬ、私の思想は悉く直に了解され、私の感情は悉く推度られ、有らゆる希望は充たされた。良人が過度の沈靜は此處では消え失せた。縦令消え失せずとも、少くとも最早私の胸を痛めるものではなかつた。

のみならず私が思ふには、良人は依然私を愛して居られ、而も其れが以前にも増して来た。折々、今度新たに知己になつた方を訪問するか、又は私等の座敷で小會を開き、其の時私が何か失策を行はせぬかと心竊に身顛しながら主婦の役目を果たした後で、良人は斯んなことを言はれるのが常であつた。

『非常だ、嬢さん、巧い巧い。沈着いて！ 眞個に巧い！』

其れが私には實に嬉しかつた。彼得堡へ着くと直ぐ、良人は母さんへの手紙を書き、私を呼んで其の末尾に二三行書き添へさせる時に、何を書きなすつたかと私の讀むのを欲しなかつた。けれども後には勿論許可を得て讀むことが出来た。

「母上は松子を能く御存じなきことと存せられ候。」斯う書いて、

「小生と雖も殆ど存せざるにて御座候。斯かる優美にして慈悲深き自信、慇懃、伶俐なる頓智、竝に温雅なる性情を何處にて得しか、小生の疑問とする

所に御座候。而して萬事極めて質朴に優美に且つ懇切に運ばれ申し候。彼女に對して恍惚として心を奪はれざる者一人も無之、小生の如きも、縦令此の上彼女を愛することを得るとも、尙ほ充分に愛する能はざるを感ずるにて候。」

「あゝ、本當に私も左様だわ。」と心の中で言つて、如何に幸福に感じたであらう。嘗てよりも一層良人に對する愛情の高まり行くやうに思ひ知らるゝさへ悦ばしい。そして我等の知己親戚に對する成功は私には全く意外であつた。何處でも彼處でも人は言ふのである、私は大層叔父さんの氣に入つて、又或る叔母さんはもう全然私に夢中になつてると。左様かと思ふと他の人は、彼得堡中に私のやうな婦人は見當らぬと言ひ、もう一人の人は、交際社會の花として立つのは私には何より容易い事だと言つて聞かせるのであつた。中にも取分け良人の従姉のD公爵夫人、年長の交際家で誰よりも先に突然私を

好きになつた方であるが、此の方が一番私を稱揚し立て、全く私を有頂天ならしめた、初めて此の夫人が私に舞踏會に行くやうに誘つて良人の承諾を願つた時、良人は私の方へ振向いて、殆ど見えるか見えない位の狡猾さうな微笑を満へて、私が行きたいか如何かを尋ねた。私は左様ですと領いて見せて顔の熱るのが感知つた。

「は、罪人が結局白状して了つたね。」と溫和く笑つた。

「だつて、貴郎は交際社會へ出ることは出来ないし又左様な事は好かんと仰つしやつたではありませんか。」歎願する眼指で微笑みながら凝と良人を眺めつゝ斯う應へた。

「是非とも行きたいと思ふなら、それちや行かう。」

「まあ嬉しい、斯んな嬉しい事は有りませんわー」

「其んなに行きたいのですか？ 其んなに？」再び斯う言はれた。

私は答へない。

「交際社會と云ふものは、其れ自身にあつては非常に悪いものではないのさ。世の中で悪いものは到達し得ない野心で、其れは何の價値も無いものです。

——いや確に行かねばなりません、行きませう。」截然斯う詞を結んだ。

「實を申しますと、何を措いても此の舞踏會へは行つて見たう御座いますわ。」

私達は行つた。私の實驗した愉快は實に凡ての私の期待以上であつた。舞踏會では、誰にも優つて私が其の中心で、私の周圍を有らゆる物が回轉してゐるやうに見え、唯私一人の爲めに其の大客間が照らされ、音楽が奏され、大勢の群集は誰も彼も皆私を嘆美つゝ互に集つてゐるやうに思はれた。舞踏してゐる若紳士も、見物してゐる老人連も、皆誰よりも私一人を好いてゐるやうに感ぜらるゝのであつた。此の舞踏會に於ける私に關する一般の輿論として、

D「公爵夫人が私に齎した報道は、畢竟斯う云ふことに歸着する。私は全く他の婦人とは異つて、私の身を取巻いてる一種獨特の田舎びた質朴と美とが窺はれると云ふのであつた。此の勝利が私を殆ど有頂天ならしめて、私は遠慮もなく良人に、今年の中にもう二回か三回、舞踏會へ是非とも出席して見たい、そして『此れ限りで満足したい。』と言つた。勿論斯う言ふ間に幾分か良心に抵抗しつゝあるのであつた。

良人は承諾した。そして二度目には初めて私と共に行つた。其の時は自身から行きたさうな様が顯然と顔に現れて、私の成功を大層喜び、嘗て言はれた事をば全然忘却れたのか、それとも考へ更されたのか何方かであつた。

其れも暫時、程なく良人は是に飽が来て、我等が送る日々の生活に倦怠を覺えるやうになつて来た。私は其れ所ではない、時偶良人の意味有りげな眞摯な眼指が物問ひたげに私を凝視めるのを認める時ですら、其の意味を解し

得ない風をした。私は此の急に炎焔を揚げた嗜好に全く酔はされて、此等の見知らぬ人々が、優雅な上流社會の雰圍氣から、種々の歡樂や物珍しい事やを私に示すかのやうで、而も此等のものは皆、私が生れて初めて経験するのであつた。私を束縛した良人の道德的感化力は今しも消え失せて、私の頗る愉快に感じた事は、此の新世界に於ては私は良人と同等の位置に在るのみならず、兎もすれば良人以上の立脚地に立つて居る様にさへ思はれ、其れが爲めに以前より一層餘分に一層深く良人を愛することが出来る事であつた。茲に私が不審に堪へなかつたのは、如何して良人は斯かる晴々しい生活をす

る私を不愉快に思はれるのか知らずと訝る點であつた。私は驕誇と自重の新感情を経験した。そして私が舞踏場へ入場するや否や、衆目威く私の方へ振向いた。而も良人は其の群集の前で私を自分の妻と主張するのを恥づる様が顯著と見えて、急いで私を振捨て、燕尾服を着けて

ゐる黒い群集の中に消え失せて了ふのであつた。

『お待ちなさいな。』私は屢ば考へた。

『ね、家へ歸るまでお待ちなさいな。そしたら貴郎はお了解でせう。一體誰の爲めに私は、能る限り艶麗しく、赫奕い許りに見せたいと苦心してるのです、今晚私を圍繞いてる此の衆人の中で、誰を私は最も愛するのですか。屹度お了解になるに違ひありませんわ！』

私が自分の成功を喜んでゐたことは事實らしい。然も其れは單に此の成功を、愛する良人の爲めに犠牲にすると云ふ條件の下に考へて見るからであつた。

私は思つた。此の交際生活が私に取つて危険になるかも知れない唯一つの理由は、交際場裡で私に遭ふ誰かを迷はせ、随つて良人の猜疑妬嫉を挑發しないとも限らぬと云ふ事であつた。併し良人は私を固く信用し、非常に沈着

いて平氣で居られる。それに此等の若い紳士は、良人に比べると皆非常に見劣りがするので、其の人々との交際に伴ふ唯一の危険は、私の見る限りでは、自分に取つて何の恐るゝ所も無い程の事であつた。併し今から回顧へて見れば、矢張り此の交際社會の多くの若紳士の注目が、私の自惚心を増長させ、自儘な根性を煽ぎ立て、良人に對する私の愛情の中には私の自重に値する或る特點が有るやうに考へさせ、従つて良人に對する私の舉動を愈々益々獨立的に、否寧ろ疎忽にするのであつた。

『は、私貴郎がNさんと大層面白さうに御話して在らしつたのを見ましたわ。』或る舞踏會の歸途に斯う言つて、彼得堡で一番よく名の知れてる貴婦人の名を指して良人を嚇した。此の人と良人とは其の晩事實話をして居られたのである。私が斯う言つたのは故意と良人の心を騒がせて見たい爲めであつた。何故かと云ふに、良人は妙に沈黙れで顔色も青かつたから。

『は、あ、何故其んな事を言ふのです、貴女の爲めに故意と言ふのでせう、ね松さん！』呟くやうに言ふ聲は纔に唇を洩れた。例の肉體的苦痛でも有るかの様に眉を擡めて、

『其んな事は貴女にも僕にも瑣細の事ではありませんか、其んな話をしたいなら他の人になさい。だか、一旦實際の事件と連結ばつた誤解は、實に僕等の心の平和を破壊する力を有つてゐます。僕は兩人は兩人だけの、眞の關係が再び歸つて來るのを希望します。』

私は恥ぢ入つて何と言はない。

『歸つて來るでせうか、松さん、甚麽思ひます？』

『だつて、今まで破壊されてはゐませんし、今後も破壊されないでせう。』と私は言つて、同時に心中でも實際左様だと思つた。

『神よ破壊される様な事の無いやうに！』斯う叫んで、

『爾うなると、田舎へ歸る時なのですから……。』

併し乍ら、良人が斯う私に言はれたのは此の時ばかりで、其の後は矢張り私のやうに楽しさうで、私は實に幸福で愉快であつた。何か退屈さうに良人が見える場合には、田舎ならば良人の爲めに眞實退屈であらうと考へて自ら慰めた。そして若し我等の關係が幾分か變化を受けたとすれば、其の場合は、夏が來て我等が再びニコルスキの家庭に母さんと三人で暮すことになるかならずに、萬事が昔と同じになるであらうと思つた。

斯くして冬は一日と過ぎて行つた。そして我等は豫定に反して、復活の祭が過ぎても尙ほ彼得堡で暮すのであつた。——翌週、全く出發の用意が出來て、何から何まで荷造りして、良人は種々の贈物やら花やら田舎用の品物やらを買ひ込んで、大層快活に親しげに見えて居つた。すると、例のD公爵夫人が來訪されて、土曜日まで滞在してR伯爵夫人の招待に行くやうにと

勧誘めた。夫人の言はれるには、伯爵夫人は大層私の出席を切望して居られ、其の上M公爵、此の方は當時彼得堡に居られ、つい先日の舞踏會から、私の知己になりたいと希望んで居られるさうで、唯此の爲めにR伯爵夫人の夜會に出席しやうとして居られると云ふことであつた。

良人は此の時部屋の向側で、私等の會話を聽いて居られた。

「ね、松子さん、貴女行くでせう、行きませんか？」と夫人が尋いた。

「でも明後日田舎へ歸る豫定で御座いますの。」と曖昧に斯う答へて良人の顔を窺つた。兩人の眼と眼ははたと會つた。良人は急いで眼を外らして了つた。夫人は續けて、

「村岡さんには私滞在するやうに言ひますわ。そして土曜日に出席して、皆を恍惚とさせて遣らうではありませんか。如何ですの？」

「ですが爾うなると種々に豫定が變つて行きますから。それにもう荷造りを

して了つたのですもの。」些し靡きかけながら私が答へると、

「然うさ、公爵が會ひたいと仰つしやるなら、——御目に懸からないで去くのが失禮なら、今夜御邸へ伺候つて來たら可からう。」向方から良人が斯う言つた。而かも其れが憤怒を抑制けてるやうな調子で、以前には例の無いことであつた。

「おや！嫉妬てゐなさるんだわ。私今初めて見ましたの、ほゝゝ。」夫人は軽く笑ひつゝ、

「でも村岡さん、私公爵の爲めに喋つてゐるのではありません、唯私達の爲めに言つてるのですわ。加之R伯爵夫人は、如何程に松子さんのお出席を希望んで在らつしやるでせう。」

「此の事は、松さんの意見次第さ。」と冷淡に言つて、良人は室を出て行かれた。

平常より餘程興奮して居られる様子である。斯う考へると心苦しくなつて、夫人には何等の確答も與へなかつた。

頓て夫人が歸ると直ぐ、私は良人の室へ行つた。すると思案に耽りつゝ、室内を往つたり來たり歩んで居られて、私が密と爪先立で室へ入つた時、私を見やうともしなければ、私が何か言ひ出すかと氣を留めるやうな風も無かつた。

『屹度彼の懐しいニコルスキの家庭を回想して居られるのだわ。』と良人を眺めて斯う心の中で考へた。

『彼の、朝の珈琲、左様よ彼の明るい應接間での。それから畑、百姓、座敷に於ける暮方、時偶兩人で密然とする神秘的な真夜中の食事、斯んな事を考へて在らつしやるんだわ。然うに違ひ無いことよ！』

私は此の時決然と自分で自分に言つた。

『世の中の有りと有らゆる舞踏會、公爵伯爵などいふ人々の密の様な言葉も、良人の歎はしげな様子や、彼の優しい愛情には換へられないわ。』

私は夜會には行きまますまい又行かうとは思ひませんと良人に告げやうと思つた。其の時良人は急に私の方を見向き、私の顔をしげく打目守りながら眉を擡めて其の優しげな物思はしげな表情を示した。

『貴女の必要なものは何ですか。』

斯う言つた顔は、穩かな何氣ない風に見えた。

私は答へない。

『もつと滞在してR伯爵夫人の招待に出席したいのですか。』

良人は穩かに言つて居られるが、其の眼の色と聲音とは極めて冷かであつた。未だ嘗て斯の様に冷かに私を見なされたことは無い。未だ嘗て斯の様に冷かに私に話されたことは無い。其の冷かさが私に斯う言はせた。

『それは左様ですわ、折角ですから。ですが貴郎には面白くないでせう、それに既う全然荷造りしましたから。』

『いや僕は火曜日まで去きますまい、それから荷物は解かせませう。夜會に行きたいならお行きなさい、何卒行つてお上げなさい。僕は出發しないでせう。』

心が興奮する時の例に洩れず、良人は大跨に室の内を彼方此方と歩き出して、復た私の方を見ない。

『眞個に貴郎の心は了解りませんわ。自分の今立つてる處から動かないで、眼で良人の後に従ひながら、』

『貴郎は何時も極めて沈着してゐると仰つしやるんぢやありませんか、(斯んな事を言はれたことは無いのに。)何故今日に限つて其んな變なことを仰つしやいますの? 私に貴郎の爲めには何時でも自分の愉快を犠牲にする覺悟で

すわ。それなのに貴郎は平常と異つて其んな皮肉な嘲弄的な口吻で仰つしやつて、そして強迫的に行かせやうとなさるのね。』

『あ、左様です、貴女は貴女を犠牲にし、(特に此の一語に力を入れて。)僕は僕を犠牲にする。何方が感心でせう、度量の競争だ。此れこそ家庭の幸福の基礎です。然うぢやないですか。』

斯かる苦い嘲弄的な言葉を聞いたのは今が最初であつた。而も此の嘲弄は私の本心に觸れないで寧ろ私を立腹させ、苦味は私を恐がらせないで私を頑固にした。良人が斯んな事を言はれるのは有り得ることだらうか。兩人の關係に於て常に禮を重んじ常に彼のやうに單純で誠實な良人にして、今の物言ひは甚麼した事だらう?

そして何の理由からだらう?

『貴郎は大層お變りなさいましたわ。』とほつと溜息吐いて、

「貴郎の眼には、私甚麼な罪を犯したやうに見えますの？ 私に對して貴郎が心に抱いて在らつしやる事は何でせう？ 正直に仰つしやつて下さい。そして私に甚麼な過失が有るか聽かせて下さい。」

「此の返答に何と言ひなさるか知らず？」冬の間一度として、良人が私を非難する理由の無かつたことを回想へて、一種得意の感を以て斯う我と我が身に尋ねて見た。

私は部屋の中央に出た。と云ふのは、良人が私の傍近く進み行くやうに仕向けたからである。そして私は良人の顔を凝視めた。

「良人は私の所へ來なさるだらう、私を其の腕に抱いて下さるだらう。そして萬事の過ぎ去つて了ふだらう……」斯う考へて、如何程良人が誤解して居られるかを明示する機會の無かつたのが悲しくなつて來た。けれども良人は室の端の處まで行つて停止り、眞直に私の方を向いて、

『すると未だ貴女は僕を解さんのですね。』

『え。』

『では説明しませう。僕の有つてゐる、のみならず有たざるを得ない感情が、僕の心に屈辱、左様です、最も深刻な屈辱を感じしめるのです。』

明かに、其の鋭い聲音に自分で驚愕して語句を中断された。

『おや如何云ふ事ですの？』斯う尋ねる私の眼には憤怒の涙が溢れるのであつた。

『僕に取つて屈辱であると云ふのは、公爵が貴女を美しいと考へるが爲めです。其の爲めに貴女が公爵の知己にならうと熱望して居るからです。自分の夫を忘れ、自分自らを忘れ、婦女子としての權威を忘れて、只管公爵の知己にならうと熱望して居るからです。貴女の夫が貴女の爲めに抱かねばならぬ感情を、貴女は汲まうと欲しないからです、貴女は婦人としての權威に就い

て、何の意識も無い様に見える。そして貴女はやつて来て、それから自分の夫に、我が身を犠牲に供して居ると言ふではありませんか。之を要するに、公爵に御目に懸かるのは僕に取つても大なる名譽ですが、僕は其れを犠牲に供したい。』

話す事が長くなればなる程、良人は益々御自分の聲音に驚くのであつた。と云ふのは此の聲は、極めて鋭く肌に徹るやうに、又残忍に響いたからである。私は今まで良人の斯んな様子を見たことも無ければ、斯んな事が有らうとも豫期けなかつた、血汐は私の胸に躍り、恐怖の念が襲うて来た。が其れと同時に不相當な毀害と侮辱を蔑視む驕誇の意識に依つて自分を支持せられ、良人の不法に對して復讐的に出るのは實に致方も無かつたのである。

『私永い間、一度は斯んな事が有らうと豫め覺悟して居りましたわ。さあもつと仰つしやつて頂戴。』

『何を貴女が豫め覺悟して居られたか僕は知らない。が此の無意味な交際社會の不行跡、懶惰、奢侈に一步一步と貴女が陥り行くのを毎日見ては、僕は萬一を氣遣ふ相當な理由が有ります。僕は今迄……今迄實際斯う言ひ出す機會を期待してゐました。此の事で到頭今日、未だ嘗て覺えないやうな恥辱と苦痛とを感じました。貴女の友達が其の汚れた心で僕の心を推測し、嫉妬、僕の嫉妬に就いて喋り出した時、實に僕は苦痛であつた。一體誰に對しての嫉妬だらう？ M公爵は僕も貴女も未だ知らない人ではないか。そして松さん貴女は故意とらしく空惚けて、僕を解して呉れやうとはしない。其れで貴女は僕の爲めに犠牲にならうと言ふのですか？ 誰の事を貴女は……少しは身を恥ぢなさい、貴女の品性の墮落を恥ぢなさい。……本當に犠牲だ！』と良人は言ひ切られた。

私は考へた。『あゝ此れが夫たるもの、權力だわ。些少も不正の事をした覺

えの無い妻を侮辱し壓伏して、彼の烈しい語句は何うだらう。夫の権力は斯ういふ所に存るんだわ。だけど私は、其の権力を咎めやうとはしないのよ。』

『いゝえ私、貴郎の犠牲にはなりませんわ。』斯う言ひながら、如何に奇異しく私の鼻孔が膨脹むやうに感じたであらう、如何に熱い血が顔に上るのを覚えてたであらう。

『私多分、土曜日の夜會へ出席します。何も悪い事ではありませんもの！』

『あゝ、僕は貴女が爾うして非常な満足を得んことを望みます。ですが我々の關係はもう其れ限りだ！』

制し難い憤怒は已に顔に現れた。

『今後貴女は僕を宥めることは出来ません。僕は馬鹿だから……』更に斯う言つたが、其の唇は痙攣いて、言ひ出した語句を結ばうと努力する様子が明かに窺はれるのであつた。

私は良人が恐かつた。此の瞬間には良人が嫌惡であつた。其の侮辱的言語に對して復讐する爲めに良人に言はうと思ふ事は澤山であつたが、若し一度唇を開いたなら、涙に搔暮れて、良人の面前に私の威嚴を失つたに違ひない。唯一の語も言はないで私は其室を去つた。が良人から自身が遠ざかるに隨つて、兩人の爲した事に就いての恐怖が心に襲ひ來るのであつた。私の幸福が悪かつてゐた繩索は寸断に振れて了つた。斯う考へて我にもあらず怖しくなつて來て、幾度か幾度か後へ戻らうかと思つた。

『だが戻つても、良人は私を解して下さる程充分に冷靜であらうか？ 若し私が無言つたまゝ、手を伸して良人を見詰めたなら、私の心を了會つて御自分の態度を一變して下さるだらうか？ 私の後悔を嘉し、寛大な冷靜な態度で私を宥して下さるだらうか。それに第一何故だらう？ 何故私の愛する良人にして、彼の様に憎らしく私を侮辱しなされたのか知らん。』

私は良人の所へは戻らないで自分の室へ歸つた。其處で潛々と泣きながら、一種の恐怖を以て兩人の間に取り交した言葉の一語一語を想起し、其れ等の言葉の代りに他の優しい言葉を置き換へて見た上、再び驚怖と侮辱の感を胸に抱いて、全光景を回想しつゝ、唯一人長い間坐つてゐたのである。夕方の茶に臨み、Sさんの居られる所で良人に逢つた時、今日は實に兩人の間に深く深い淵が出来たやうな氣がした。Sさんは私共と一緒に滞在して居られる方で、何時御出立ですと私に尋ねた。すると良人は私の答へやうとする前に、『來週の火曜です、僕等はR伯爵夫人の御招待に出席しやうと考へてゐます。——松さん行くだらうね?』と私の方に振向いて言つた。此の簡単な質問の調子に驚愕して、私は怖々しながら良人の顔を窺つた。良人の眼は眞直に私を凝視してゐる、そして憤怒と嘲弄を表現してゐる。聲は確固して如何にも冷かであつた。

『え、左様ですわ。』私は答へた。

晩方、兩人限りになつた時、良人は私の傍へ来て、それから其の手を差し出して、

『何卒僕の言つた事を忘れて下さい。』と言はれた。

私は其の手を取つて、微笑は私の唇に顫へた。涙は今や眼の中に溢れやうとしてゐる。けれども良人は復た手を引込めて、感情的な光景を恐るゝかの如く、私より可也遠い臂掛椅子に腰を下した。

『御自分が何處までも正しいと思つて在らつしやるのか知ら?』斯う思つて何時なりと和睦をする覺悟であつた。夜會には行きますまいと言はうかと口元まで出かゝつてゐるのであつた。

『僕は母さんに書簡を遣つて歸郷を延引した事を知らせやう、でないと思配なざるから。』

『それで何時御出發になる御心算ですの？』
『火曜日に、夜會の後で。』

『私の爲めに爾うなさらぬやうにして下さいな。』と言つて良人の眼を凝視めたが、良人の眼は唯見てゐると云ふだけで、私に何事をも答へない。其の様子が恰も薄い幔幕が良人と私との間を隔てゝゐるかのやう。良人の顔は突然老耄けたやうで私には厭はしく見えた。

我等は夜會に臨んだ。其處には名有る多くの人々と我等の知己の人達とが出席して居られた。私は他の夫人達と一所に席に着いた。其の時公爵が來られたので、私は挨拶する爲めに餘儀なく立ち立つた。そして起ちながら我知らず良人を捜した。すると客間の向側に良人の顔を認めた。良人は私の方を見てゐたが、私が見付けた時眼を外らした。私は急に途方に暮れるやうな一種の慚愧と苦痛とを胸に覺えて、公爵の注視の下に顔は慈耳朶までも眞赤に

なつた。併し私は厭でも應でも立ち續けて公爵の言はれる事に耳を傾けねばならなかつた。そして其の間公爵は私の、髮の恰好から爪先までを注視つて視めつするのであつた。

會話の時間は長くはなかつた。私の傍に公爵の坐るべき餘地は無く、そして公爵は私が餘程窮屈に感じてゐることを確に見抜かれたらしい。二人は此の前の舞踏會の事や、夏私が何處で暮したかと云ふ事や、其の外二三の事に就いて話した。別れる際に、公爵は良人とも知己になりたいと言はれた。そして私は間もなく二人が客間の一方で會つて談話をして居られるのを見受けた。公爵は明かに私の事に就いて話して居られるらしい。其の譯は、談話の間に私の居る方を見返つて微笑を洩したからである。

良人の顔は急に赧くなつた。丁寧に御辭儀をして公爵に別れた。私も亦顔を赧めた。公爵が私に就いて、而も人も有らうに取分け良人に對つて話され

た事を考へて心に恥ぢたからである。公爵が私と話して居られた時人は皆私の見ともない狼狽を見たに違ひない、それから良人の變な舉動を注意したに違ひない、如何に其れを解釋し、後で私等を如何様に尊することであらう？……』

D夫人は私を連れて家路に就いた。道すがら二人は良人の事を噂し合つた。私は此の不幸なる招待の事から良人と私との間に起つた悶着を殘らず夫人に話さずには居られなかつた。すると夫人は私を慰和めて、其れは全く無意味な誤解で、結婚初期の生活には随分と有りがちの事だが、何も心を痛める程の結果を齎すものではないと言ひ、それから又夫人は夫人の見解から、良人の性格は如何であるかと云ふことを説明して、良人は沈黙で而も尊大であると斷言した、私も是には同意見で、今こそ私は充分冷靜に、以前にも立勝つて良人を評價することになつて來たやうに思はれるのであつた。

然りながら、良人と私が再び兩人限りになつた時に、良人に就いての此の判斷が私の良心に一の罪惡のやうに思はれて、兩人を隔離する彼の深淵は以前より一層廣がり行くのを感ずるのであつた。

八

其後と云ふものは、我等の生活及び關係は根本からの變化を受けた。唯兩人限りで居ても最早昔の様に楽しくない。我等が今迄避けた疑問が起つて來て、兩人限りで話すよりも第三者の居る處で話し合ふのが我等に取つて氣樂であつた。

談話が田舎生活や舞踏會の事に移るときは、何時も戦々として薄氷を踏んでゐる様に思はれ、互に視線を避けるのであつた。

兩人共、一體何處に我等を隔離する彼の深淵が在るかと思ひ、其の中に落

ち込むのを避けやうと努めるやうに見えた。

私は何うしても、良人は高慢で癩癩であるから、我身を守る爲めには先づ良人を激させない事が必要だと考へるより外は無かつた。良人は又斯う信じて居られる、私は社交を離れて生活し得ない、田舎は私の氣に適合ない、それで良人は此の不幸な趣味に盲従する必要が有ると。而も兩人共此の問題に對する直接の論及を避け、兩方で互に對手が誤つてゐると断定した。

兩人共疾の昔に、お互の眼に世界の最も完全な人であるとは見えなくなつて了つた。他人と比較して、竊に相互で判断するのであつた。

私は彼得堡を去る前に病氣になつて、田舎へ歸らずに市の近くに夏の住居を定め、良人は唯一人母さんを見舞ふ爲めに歸つた。良人の出發する時、私は幾んど快復して一緒に歸れるのであつたが、良人は後に残つて居るやうに主張し、其の假托に私の今後の健康が心配だからと言はれるのであつた。併

し實際のところ、良人は私の健康には頓着なく、唯恐るゝ所は田舎で幸福を享けることが出来まいと云ふ事であつたやうに思はれた。

私は強つてとは言はなかつた。そして後に残つた。良人が居なくなると、さて襲ひ来る退屈と寂寥とは堪へ難い。併しながら良人が再び歸つて來られた時、其の嘗て持來した物を、今度は私の生活に齎さなかつたことが了解つた。我等の往日の關係——良人に隠す有らゆる思想有らゆる感情は一として罪惡の印象を私に與へざるは無かつた時、良人の動作良人の言葉は悉く是れ私には完美の模型に見えた時、胸に餘る喜悅から互に顔を見合せて、如何なる瑣細な話らぬ事にも何となく可笑しさを覺えた時——の關係は何時とは知らず他の關係に移り行き、昔の其れは甚麼なつたものやら説明することが出来なかつた。

我等には各自別々の利害別々の職務が有つて、最早是を共にしやうと試み